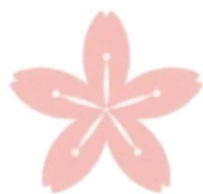


学習院女子大学
国際協力研修(ベトナム)
平成 30 年 2 月 27 日～3 月 9 日
報告書



学習院女子大学
Gakushuin Women's College

国際協力研修～ベトナム

目 次

国際文化交流演習にて

1. ドイモイが与えたベトナム文化への影響	1
2. ベトナムイクス	4
3. ベトナムの貧困状態	7
4. 村と村人	11
5. 農業国から工業国へ	14
6. ベトナムの思想	17

活動報告

1 日目/最上 彩瑚・小堀 和	20
2 日目/福島 歩実・東原 咲	22
3 日目/妹尾 菜々子・塚本 玲子	24
4 日目/安達 彩花・五十嵐 美柚	27
5 日目/福島 歩実・東原 咲	29
6 日目/松能 希・三角 文香	31
7 日目/安達 彩花・五十嵐 美柚	34
8 日目/吉水 祐子・野口 朋子	36
9 日目/最上 彩瑚・小堀 和	39
10 日目/妹尾 菜々子・塚本 玲子	41

命の授業	44
------	----

ベトナム海外研修の振り返り(次年度に向けて)	49
------------------------	----

ベトナムフォトアルバム	51
-------------	----

ベトナム海外研修を終えて	59
--------------	----

1. ドイモイが与えたベトナム文化への影響

1. ドイモイ政策とは何か

まず、初めに、ドイモイ政策とは何なのかについて見てみる。1986年12月に、ベトナム共産党大会でチュオン・チンが採択し、以下の事柄を検討した。例えば、社会主義路線の見直し、産業政策の見直し、市場経済の導入や国際協力への参加などである。このことから、計画経済から市場経済への変革を追及し、より良い社会を築こうとしたことがわかる。



写真1 チュオン・チン

2. 冠婚葬祭について

次に、冠婚葬祭について述べたい。冠婚葬祭の歴史について見てみると、1945年の独立以前は家族の社会的地位を誇示する機会であり、地位をめぐる競争の場であった。結納では、現在も伝統に従い、花婿の家族に贈るものとして扱われている。また、婚礼衣装では、以前は新郎新婦共にシャツにズボン、胸に花という出で立ち、現在はウェディングドレスとスーツが一般的であり、お色直しで真っ赤なアオザイと冠がある。

3. アオザイ

アオザイとは、キン族の民族衣装で、腰の上まで左右のスリットが入った長袖のワンピースとズボンからなる長い衣装のことを示す。歴史とスタイルには、ベトナムの文化やファッションの融合性と固有性といった特徴が体现されている。アオザイの由来は、16世紀から18世紀の中国の影響により、生まれた。17世紀半ばから、男女とも中国風の短いご身衣とズボンを使用し、18世紀後半に、中国の「三裁図会」という本を基準にした衣装が流行し、現在のアオザイになったのだ。現在、女性は誰でも二、三枚のアオザイを持っており、お正月や結婚式、祭礼など特別な時だけに使用されている。また、男性用もあり、祭礼服として扱われている。



写真2 アオザイ

4. 食文化

ベトナムの食文化や経済がドイモイ政策によってどう変化したのかについて詳しく述べたい。以下の表も参考にしながら、考察したい。表1では、ドイモイ政策が行われる前を Before とし、ドイモイ政策が行われた後を After としてシンプルにまとめたものである。

まず、初めにドイモイ政策が行われる以前について述べる。ドイモイ政策以前のベトナム社会は、長い間「計画経済」に縛られ、工業や商業活動が発展していなく、街全体もあまり活性化していなかった。さらに、1985 年まで「配給切符」によって、米、砂糖、肉、布地など生活必需品を手に入れた。加えて、物流システムはこの時どうだったのかについて分析してみると、この時は国家の管理下に置かれていたため、あまり自由に行われていなかったことが分かる。このため、ドイモイ政策が行われる以前では、都市の市場は活気がなく、街全体も死んだ街の様に、暗く活性化していなかったことが分かる。

次に、ドイモイ政策が行われた後について述べる。ドイモイ政策が行われた後は、ハノイを中心とする北部ベトナムにおいて都市と他の市の農村全体は社会的、経済的、文化的にも大変緊密な関係を維持することができた。更に、最近では開放経済を標榜するドイモイにより、中国国境貿易が盛んになり、多くの中国製品を手がける商業材も登場している。つまり、伝統的生産が復活し、より多くの外国製品が流入し、より街も活性化したと言えるだろう。

表1 ドイモイ政策が行われる前と後の食文化や経済の変化

Before	After
● 経済発展→X	● 経済発展→O
● 外食する人→少ない	● 外食する人→多い
● 冷凍食品や総菜→少ない	● 冷凍食品や総菜→多い
● 屋台数→少ない	● 屋台数→多い
● 街中→△	● 街中→O

5. 文化遺産と美術品

次は、ドイモイ政策によって、ベトナムの文化遺産と美術品にどのような変化がもたらされたかについて述べていく。まず、ドイモイ以前について少し述べると、1945 年に独立し、フランスの極東学院にかわって東洋博古学院が古跡保護の責任を持つことになるが、直後の抗仏戦争では仏軍による宗教建築の破壊や、仏軍の駐屯を恐れる村人による寺やディンが破壊された。抗仏戦争終結後には、伝統的価値観の変化によって宗教建築を封建時代の象徴的遺産として破壊したりされてきた。しかし、これをみかねた中央政府により、破壊、崩壊を防ぐために 1957 年に遺跡保護に関する議定を制定し、さらに 1962 年にはじめて「歴史文化遺跡」が指定された。これの対象としては、不動産中心とされており動産のものは若干例しかしていされていなかった。しかし、1986 年に共産党大会でチュオン・チンによりドイモイ政策が採択されたことにより、この文化遺産・美術品も影響をうけた。2001 年に文化遺産法が制定され、初めて「文化遺産」という枠組みが初めて登場した。この文化遺産法は、ドイモイ以後の国際関係の変化を受け、国際水準を考慮して作成されたものである。ここでは文化遺産とは「非物質文化と物質文化を含む」と定義され、無形文化財が新しく加えられた。指定された文化遺産の例を挙げると、1993 年にフエ建造物軍、1994 年にはハロン湾が登録されている。こうして、ベトナムの文化遺産・美術品共に保護されるようになった。ところが、世界遺産に指定された階段から急速に整備が進み、保護保存については保障される反面、ほかの文化遺産がそれらの影

に隠れてしまう感や、盗掘されたりするという問題が出てきてしまったのだ。このように、文化遺産法が制定されたことにより、ベトナムの芸術家達には新しい光がもたらされ、活動力になる一方、隣村の伝説への対抗心や道路開発にからむ村民の経済戦略も関係し、過去の遺産を現代の価値観よりいかようにも処理されてしまうことに対する課題もできた。

このように、ドイモイ政策は文化遺産や美術品にも多くの影響を与えたことが分かった。今後は課題を克服していくことや、文化遺産・美術品を後世に受け継いでいくことが必要になってくるのではないかな。

6. 現代文学

ドイモイ政策が採択される前のベトナムの現代文学には「表現の自由」が確率されておらず、政府による規制や検閲が厳しいものであった。これは1943年の「文化大綱」によるものであり。この規則の元で、思想・学術・芸術の基本的な方針が策定されていた。1986年に国全体でドイモイ政策が採択されたあとも、文化面においては「文化・芸術はやむことなく党性と人民性を向上させなければならない」とされており、この時点ではまだ表現の自由は認められていなかった。

このように文学を取り巻く環境は戦後と変わらないままであったが、ついに1987年11月28日に「文化文学芸術を指導管理するレベルを高めて刷新し、創造能力を発揮させ、文化文学芸術を新たな一步に発展させる決議」が採択された。この決議は一般に「政治局五号決議」と呼ばれており、この決議が採択されたことでベトナムにおける文化の位置づけが変わり始めた。五号決議の中では「文芸は精神生活の重要な需要」とされ、ガイドラインが明示されるようになり、作家や芸術家たちはどのような点に留意して作品をつくりあげればいいのかかわかるようになった。

ドイモイ政策の採択に起因してとられた政策によって、ベトナムでは徐々にではあるが「表現の自由」が確立していった。加えて、政治局五号決議が採択された1987年から1989年の約2年間は「ハノイの春」と呼ばれており、文学全体が現代に向けて大きく発展した期間であった。男性の作家だけでなく、女性の作家も多く現れ始めたのもこの時期である。また、日本にもベトナム文学が流入するようになり、日本語に翻訳された出版物も多い。

下記の表にあげたのは、1990年代から現代にかけての出版物の状況をまとめたものであるが、ベトナム国内においても出版物の変化がみられる。

表2 1990年代から現代にかけての出版物の状況

年次	出版タイトル数			出版部数		
	総数	ベトナム語 (%)	外国語 (%)	総数 (100万部)	ベトナム語 (%)	外国語 (%)
1995	8186	98.7	1.3	169.8	99.9	0.1
2000	9487	99.1	0.9	177.6	99.7	0.3
2001	11445	99.2	0.8	166.5	99.7	0.3
2002	13515	99.2	0.8	217.4	99.6	0.5
2003	14059	99.1	0.9	222.9	99.6	0.4

ベトナム語の出版物の総数が安定しているとともに、外国語の出版物が若干ではある増えている。それまでは手に入りにくかった書籍なども現代になるにつれて入手しやすくなっていることが考えられる。このような変遷をたどりな

がら、ベトナムは国政や経済だけでなく、文化面でも戦後のマルクス・レーニン主義的な体制から復興してきたのである。

7. 映像

ベトナムの映画作成は抗仏戦争中に始まり、映画の中心はドキュメンタリーであった。ストーリーは大体「我は善、敵は悪」という構成になっており、製作費や検閲などが国に大きく関与していることから戦意高揚の手段として用いられた。

下記の表はドイモイ前と後の映像の変化である。

表3 ドイモイ前と後の映像の変化

	ドイモイ前	ドイモイ後
ストーリー	プロパガンダが主流	多様化
作品	国内	外国映画の流入
家庭	△	テレビやビデオ
ドラマ	旧ソ連や東欧の国のもの	アジア各国のものもプラス
テレビ放送	ドキュメンタリー	参加型バラエティ

ドイモイの後では、経済的に豊かになった背景と、検閲の緩和により芸術の分野において大きな変革が起きたとわかる。映画産業としては、韓国系企業が配給や興行において積極的なビジネスを展開しているのが特徴となっている。映画上映数は興行収入ともに年々増加の傾向にある一方で、国内映画の本数は減少している点から、映画上映は海外輸入に頼っているといえる。ちなみに 2013 年に上映が確認されている 115 本のうち、米国が約6割、韓国が約1割を占めている。テレビ市場では、現在有料ケーブルが活発化しており、海外ドラマ(特に韓国もの)や映画、スポーツなど幅広く提供されている。ベトナムで放映されたドラマは恋愛ものが多く、その数は 2013 年までで100を超えている。日本ドラマは「おしん」が最もよく知られ、2013 年までに 27 作品が放映されているが、日本のドラマは、放映権料が高い、著作権の問題、エピソード数が少ない、ドラマの内容がわかりづらい。などの理由から、ベトナム国民に親しまれにくい傾向にある。

ドイモイ前後で多大な変化がみられるが、近年もその流れは拡大している。ベトナム政府が国内映画の推進を図る一方でベトナム国内の映画産業は衰退がみられる。テレビ番組も国外のものが増えており、ドイモイ前から考えられないような映像の多様化が進んでいる。

2. ベトナムクス

1. ベトナムの国家機関

1-1. 国家機関

ベトナムは 1945 年 9 月 2 日に建国した。ベトナムの政治体制は社会主義共和国で、政党はベトナム共産党(一党体制)である。国会は一院制(任期 5 年で、行政権は内閣、立法権は国会議会、司法権は最高人民裁判所、国家機構は党が国家の基本方針や方法性を決定する。それを受けて行政機関が政策執行をする。

今井・岩井(2004)は国家機関が制定する法規について、「①国会が制定する憲法・法律・決議、②国家常務委員会が制定する法令・決議、③国家主席が制定する国家主席令・決定、④政府が制定する政府決議、議定書がある。このほかに、首相の決定・指示、各省大臣の決定・指示・通達、最高人民裁判所裁判官会議の決議、高人民検察院院長の決定・指示・調達などがある」と述べている。

1-2. ホーチミン思想

「ホーチミン思想」とはホー・チ・ミンにより主唱されたベトナムの基本的問題に関する政治思想のことである。彼はベトナム民主共和国の初代大統領で、かつてベトナムに大きな影響を及ぼした人物である。1991年6月の第7回党大会において、ベトナム共産党は従来の「マルクス・レーニン主義」に加えて、党規約への明記を決定することから生まれた。具体的に述べると「ホーチミン思想」とは「マルクス・レーニン主義の創造的適用」とされる。それは社会主義モデルとしてのマルクス・レーニン主義の普遍性から成立したものである。その上でベトナムの特殊性として、革命の階級的契機よりも民族的契機を重視した点が特徴である。

2. ドイモイ政策

ドイモイとは1986年に採用されたベトナムの改革開放路線のことを指し、ベトナム語でドイは変化、モイは新しいという意味で「刷新」を表す。

ドイモイの基本政策は体制の構築は時間をかけて徐々に行うことがよいとする社会主義路線の変更、重工業優先から農業中心に変更する産業政策の見直し、従来の分配経済から180度転換するという市場経済の導入、国際平和の構築に積極的に協力する国際協力への参画の4点がある。その中で敵国との和解も行われ、中国との関係改善、そのためのカンボジア問題の政治的解決が図られた。

ドイモイ政策が採択された背景として、ベトナム戦争後の政策がある。1978年12月25日には統一後初めて第4回ベトナム共産党大会が開催され、急激な集団化と計画経済が実施された。それにより国民の生産意欲が低下し、また、難民問題により国際威信を傷つけた。加えて、中国との関係が悪化し、資本主義諸国との経済関係は途絶え、国際的に孤立し深刻な経済困難に陥った。そこから奪還するために共産党による一党支配体制の維持を前提としつつ、国家丸抱えの傾向を持つ国家管理下の計画経済に依拠した経営運営への転換を事業の中核としているドイモイ政策が採択された。

ドイモイの結果として、インフレ克服、食糧生産増加、米輸出国化などの成果が上がったため、1992年4月公布の新憲法にドイモイ路線を明記し、その加速を図った。また、2011年第11回党大会でもドイモイ政策の継続が確認された。

2. ベトナムの地方機関

「中央と地方について」を中心に調べていく。まず、中央が地方を掌握出来ていない理由として、「多様な民族や地域性がある」という事だった。その事に関連してベトナムの民族構成及びに、各民族の特色を見ていきたい。ベトナムの民族で最も多いのが、キン族で86.2%を占めている。次に多い民族はタイ族と、タイ族であるが2%に満たない。その他にもベトナムでは、36の少数民族がいるために、中心となる国家が一つの国としてまとめることの難しさが分かる。一番割合が多かったキン族の分布としては、ベトナム以外の周辺国である、中国、ラオス、カンボジア、タイなどでも少数民族として暮らしている。ベトナム戦争で発生した難民が、アメリカ、香港、オーストラリアなどに多数亡命している事が有名である。その中でも特に、オーストラリアでは、1990年にオーストラリア国内で誕生したベトナム系の人口が、難民として流入してきた人口を上回り、芸術やスポーツの分野で活躍する者も出てくるなど、一定の社会基盤を築いている。日本でもキン族の人々は居住しているが、日本国内では朝鮮人・韓国人・中国人・フィリピン人など他の外国人と比較するとその割合は多くないという事が出来る。

次に国家機関の過去の具体例について紹介していきたい。ベトナムは、共産党の一元的支配体制の下に置かれていた。そのために、国家と社会の運営に党が介入する事態が恒常化していた。その表れとして、国営企業・合作社などの管理ポストは、党員によってほぼ独占されていたのだ。そのために、国家と社会の運営が円滑に行くか否かは、党員・幹部のリーダーシップと行政・管理能力次第となる。ベトナム戦争後に表面化した国家の大きな問題としては二つある。一つ目が、国家機関における人事の停滞だ。これは、ベトナム戦争の終了によって、従来軍事に従事していた多数の党員・幹部が職場に復帰し、その人々で多くのポストが埋まってしまったために起こった事件だ。この影響で若手の昇給などが困難になってしまい、職場の士気が下がってしまった。二つ目に、幹部の多くが経済建設期に必要とされる管理・運営技術や専門知識に欠けていたことだ。その影響で、有能な信頼のおける党員・活動家が絶対的に不足してしまい、国民からの政治への信頼が失われていった。また、1970年代後半経済全般の不調によって生じた深刻な食糧・物資不足は、国家による物資の把握が極めて不十分であったために起きてしまっ

た。それに乗じて南北の国営企業・集団農業組織・国家機関・軍隊・公安組織などまでもが、自由市場や闇市場に深く関与し、更には物資の横流しや市場投機活動、汚職などに手を染めてしまった。

このようなお役所の官尊民卑的な仕事体制に、民衆の不満が潜在していた。その事を踏まえて行ったのが、現在に渡って行われている刷新路線だ。この刷新路線を通して経済的側面を中軸としながらも、国内政治に対しても直接的や間接的に影響を加えていった。

3. ベトナムの安全保障

ベトナムの安全を脅かす存在は主に中国である。歴史的にも、ベトナムが中国から安全であったのは国内分裂や蛮族の脅威に晒されている時など、中国の力が弱まっているときであった。中国という強大な力のある国から安全を保障する為には、中国との交友関係を深めること、中国と同様に強大な力のあるアメリカとの友好関係を築くこと、そして“中国の脅威”に警戒心をもつ他の東南アジアの国との関係を強くすることがあげられる。ここでは東南アジアの国との関係の強化の為に用いられた、ASEAN 地域フォーラムについて述べたいと思う。ASEAN 地域フォーラムは、政治・安全諸問題に関する対話と協力を通じ、アジア太平洋地域の安全保障環境を向上させることを目的とし、1994 年に開催された。ベトナムは開催年の 1994 年 4 月に正式メンバーとして加盟した。参加国はベトナムやブルネイ、インドネシア等の ASEAN10 か国と日本やアメリカ、カナダ等の 15 か国、スリランカの 1 地域、そして EU である。毎年夏の閣僚会合（外相）を中心とする一連の会議の連続体から構成されているものである。ベトナムは ASEAN 自由貿易の実現に参加し、他の ASEAN 加盟国との善隣友好協力関係を構築した。また、ASEAN 加盟国として、ベトナムは ASEAN 加盟国以外の国々とも関係を強化すると共に、ASEAN+3、東アジアサミット、アジア太平洋経済協力会議、アジア欧州会議、世界貿易機関などの加盟諸国とも関係を結んだ。これを通じて、国際社会におけるベトナムの地位を高めている

4. 国民統合と開発——少数民族暴動

この節では、ベトナムの中部高原で発生した少数民族暴動（デガ運動）を中心とした内容と、その暴動の背景の説明となる。2002 年 2 月に、政府の国民統合政策に抵抗する理由として中部高原では、数万人のモンタニヤール先住民が巻き込まれたデガ運動が起こった。そのきっかけで、ベトナム共産党および政府は、政策の失敗を認め、モンタニヤール先住民に優先的に土地を分与し、新規移民事業の大幅な縮小などを行うことで、先住民の不満を緩和する政策をとった。

昔から、少数民族となるモンタニヤール先住民などは、国民統合政策や移民に抵抗することで、民族の独立を主張し続けてきた。例えば、1958 年 6 月に、南ベトナムのゴ・ディン・ジエム政権の下で、その時に実施されたベトナム語による普通教育、土地の収用と北ベトナムからの避難民の大量入植ということを反対するために、イーバム・エニユオルは四つの有力民族（バフナル、ジャライ、ラデとカホー）を団結させ、バジャラカ運動を組織し、民族自治を主張とした。この組織はあとで弾圧を受け、主要人物（イーバムら）は逮捕されたが、1963 年にジエム大統領は暗殺されることで、イーバムらは釈放された。そこでまた、カンボジア国家元首相シハヌークなどの人物と一緒に、「被抑圧諸民族闘争統一戦線」（フルロ）を成立し、これは、デガ運動の起源となる。

しかし、1969 年、アメリカのフルロに解散するという要求で、イーバムらはカンボジアに亡命し、ベトナム国内のモンタニヤールはアメリカの支援を受け、農地所有権などが再公認することによって、独立運動が抑えられた。その後、1975 年南ベトナムの消滅でフルロは再建されたが、ベトナム軍の徹底的な掃討作戦で、フルロはカンボジアに潜入した。また、1992 年に国連カンボジア暫定統治機構に投降し、アメリカに移住した。彼らは、モンタニヤール協会法人を組織し、デガ・プロテスタントティズムを結成した。

1995 年以降、中部高原はコーヒー景気を沸き、モンタニヤールの不公平感を緩和したが、アメリカに移住した元フルロは、不法移民の野放やダム建設による土地収用などで、政府に不満を抱く人々を対象に布教を行った。人々の不満は 2000 年のコーヒー価格暴落によって増加し、2001 年に、デガ運動は中部高原諸都市で発生した。

いかにして、モンタニヤール住民の不公平感を拭き去り、国民統合を推進するかということは、今後の中部高原政策の重い課題となる。

5. 日本とベトナムの関係

ベトナム人は日本人にとっても親しみを感じ、日本のことが大好きとまで言ってくれる国だと聞いたことがある。資料を読み進めていくうちに主に 3 つの理由があることが分かった。一つはボート・ピープルに対しての定住を認めたこと。二つ目は 1992 年に 455 億円の円借款を供与したこと。三つめは日本がベトナムの最大の貿易相手国だということ。これらの出来事があったから、両国の人物交流が今にまで大きく拡大、また文化交流にも進展しているのである。

6-1. ボート・ピープルに対しての拡大

まず、ボート・ピープルとは紛争や圧政などの下にある地から、漁船やヨットなどの小舟に乗り難民となって外国へ逃げ出した人たちのことである。当時一時的な滞在のみを認めていたが、1978 年に 4 月に定住を認めた。その後、ベトナム難民を含むインドシナ難民の定住許可条件を順次緩和していき、カンボジア紛争勃発後の 1979 年 10 月にはインドシナ難民の定住を支援する方針を決定した。この決定に元づき三つの定住促進施設が設置された。日本だけの視点で見ると、日本はベトナムだけでなく他の国に対しても難民の受け入れをしている良い国だと思ってしまうかもしれない。だけど、日本の難民を受け入れる数というのは決して多くはないので今後の課題の一つでもあるのではないだろうか。

6-2. 1992 年 455 億円の円借款を供与したことを契機に明るい兆しがみえた

1989 年 9 月にベトナム軍がカンボジアから撤退し 1991 年 10 月にカンボジア和平合意が成立したことを受け、日本はベトナムへの援助再開に向けた検討を進め、1992 年 12 月に 455 億円の円借款を供与した。これを契機に、日本とベトナムとの関係は、明るい兆しを帯びてきた。また、1994 年 2 月に米国の対ベトナム禁輸措置が解除されたことは、両国間の経済交流の進展にも大きく寄付した。1997 年には大阪にベトナムの総領事館が開設された。このようにこの頃からだんだん日本とベトナムの関係というのは深まってきたことがわかる。また、日本の対ベトナム円借款再開以降、日本はベトナムにとっての最大の援助国の地位を占めてきた。ところで援助をすることのメリットはいったい何なのであろうか。あくまで私の推測だが、これからますます経済発展しそうな国に援助をすることは日本にもメリットがある。利益が出ると思えば、喜んで積極的に援助をするというのも一つの目的だったのではないだろうか。

6-3. 日本がベトナムの最大貿易相手国

これはお互いにとってメリットがあるのではないかと考えられる。難民の受け入れや資金援助をするだけでなく最大の貿易相手国になることによってお互いの経済発展にもつながる。経済が良くなるということはさらにものを作る必要があり、働く人、働く場所を求める人々に職を提供できる。ちなみに 2002 年のベトナムからの輸入額は 3162 億円、ベトナムからの輸出額は 2663 億円ということで輸入額のほうが多いことがわかる。主な輸入品は繊維製品、水産物、原油で、輸出品は一般機器、電気機器、繊維品、金属品である。

私の所属しているゼミ、国際交流サークルにもベトナム人は比較的多くいて身近にベトナム人がいる。長い歴史を経てこれまで難民の受け入れ、資金援助をしてきたけど、今は共に生きていく仲にまで時代は変わってきたことを実感する。今は日本でもベトナム料理はとてもなじみのある料理である。また、旅行でベトナムを訪れる日本人もここ最近増えていてこれからもますます日本にとってベトナムは必要不可欠な存在なのではないだろうか。

3. ベトナムの貧困状態

1. 人口分布

- ・ベトナムの人口→2016 年度で約 9,444 万人と報告されており、1961 年と比べて約 3 倍近くも増加している。
- ・1961 年の人口ピラミッドは、若者層が多く、高齢層が少ない富士山型であったが、2016 年では若者が少なく、中年層が多いつぼ型に近づきつつあり、数十年後には、少子高齢化に悩まされる可能性がある。
- ・2005 年に人口抑制と貧困解消を目的とした二人っ子政策のような家族計画運動を始動した。

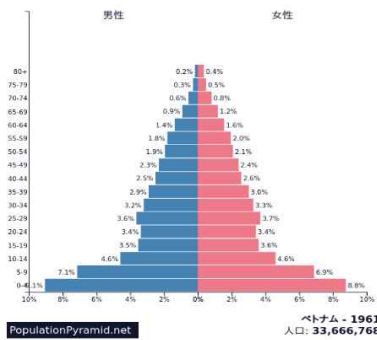


図 1 1961 年

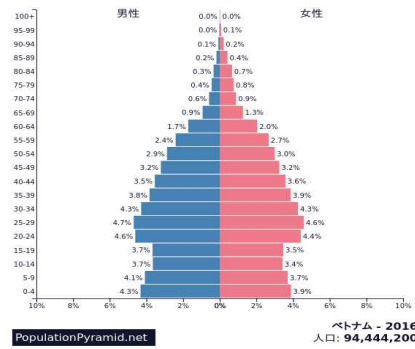


図 2 2016 年

2. ベトナムの教育・入試制度

2-1. 教育制度の特徴

- 2 学期制→1 学期 9 月~1 月 2 学期 1 月~5 月
- 小学校 5 年、中学校 4 年、高校 3 年で卒業
- 義務教育→6~15 歳で日本と同じく 9 年間

大都市(ハノイ・ホーチミン)は高校進学が当たり前
農村部(フエ)は義務教育さえも修了していないことも

- 識字率ほぼ 100%→政府の努力と英語と同じアルファベット表記のベトナム語は読みやすいからかと推測される。

2-2. ベトナムの教育制度と大学入試制度

- 大学入試時期は 7 月で、試験問題は教育訓練省が問題を制作し、個々の二次試験はない
- 全国共通の試験であり、一度の試験だけで第1~3 希望大学の判定が受けられるのは効率的であるが、一度の試験のみであるためプレッシャーが大きい
- 受験科目→三教科入試であることが絶対条件であり、科目の追加や省略は許されない

文系①文学・歴史・地理
文系②文学・数学・外国語(英語 or フランス語 or ロシア語 or 中国語)
理系①物理・数学・化学
理系②生物・数学・化学

3. ベトナムの社会保障と地域格差

3-1. 社会保障制度

かつてベトナムでは、公務員や軍事関係者など、社会保障はごく一部の人々に限られていた。その理由には政府から保険金が会社や各組織に出されていたため、加入者が自分自身で払う必要がなかったことが挙げられる。

しかし、市場が発展するにつれ民間企業の重要性が拡大してきた。さらに民間企業の重要性が拡大により、今までの保険制度では財政に大きな負担がかかる。そのため、「強制加入保険」と「任意加入保険」という二つの枠組みを作り新社会保障制度が開始された。また、強制加入保険は、従来までの対象加入者に加えて、従業員が 10 人以上の民間・外資系企業や国際機関の 3 か月以上勤務の人に限られた。

3-2. 地域格差

ドイモイ以降、ベトナムでは大規模な都市化が進んでいった。しかし、他の東南アジア諸国と比べるとそれほど都市化が進んでいないと考えられている。また、1990 年以前、ベトナムでは、配給制度や生活必需品の切符制従業員の家族に対しての住居の提供などが実施されており、貧富の格差はあまり感じられなかった。

しかし、1990 年第以降になると 2001 年時点で平均収入が 4 倍にも広がり、貧富の差が一気に拡大した。また、都市でも貧富の差が広がっている。市場経済の拡大や輸入品生産の拡大等が背景にあると考える。さらに、大都市と農村の生活水準の低迷が、教育水準にも現れている。

4. ジェンダー

ベトナムの農村社会では、長年女性は公的な場から締め出されてきた。村落の行政、祭礼、儀式は全て男性が主体となって行ってきた。しかし、家庭内になると女性の立場は一転し、女性の立場が強くなる。ベトナムでは外の世界と内の世界で、男女の活動の領域が分けられており、女性は皆が何かしら働いて、家族のための収入を得ている。しかし、この働く女性の姿は欧米の女性が経済的自立と社会進出を目指して働く姿とは程遠い。長く続いた戦争は、内を守る女性、外で戦う男性というカラチで男女の領域を強める結果をもたらし、それに伴った教育機関も設立された。戦後、大きな政治的な影響力をもつ退役軍人は男社会だ。90年代若い女性の教育程度が大幅に向上したが、年労働市場は建設現場での肉体労働が中心で、まだまだ女性に解放されているとは言えない。その影響を受け、多くの高学歴の女性たちは、村に留まらなければならない状況にある。ベトナム人女性はその大半が就労し、稼ぎを得ているが、その地位は決して高いものではないことには留意すべきである。このことは「女性が働くこと=稼ぎを得ること」、つまり女性の「社会参画」の進展というもの、女性の地位を高めることに直結しないとの例があることを実際に指し示している。

今回ベトナムのジェンダーについて調べ、ベトナムの社会には日本と同様に男女格差がある事が明らかになった。女性が男性よりも低い地位にあり又、経済、教育、政治の各面でそれぞれ男性に対して不平等な状況にあると言える。

5. 移住・移動

子供を持つ農家の親の最大の関心は子供の自立にあり、後継者一人を除き他の子供達には農業を脱出してほしいと願う。ベトナムの国内移住には数年間の移住、短期間の移住、短期間の移動・季節移動など様々な形態が取られている。都市へと移住し成功者はほとんどが「つて」で就職している。「つて」がない移住者は安定した職業に就けない為、彼らが完全に故郷を離脱するのは難しい。人々はより良い生活や高額な現金収入を求め、都市部や開拓地へ移動しつつある。一方、移住先の人々によって、「都市の農村化」「貧困の流入」との見方もある。又、スラムでは麻薬やエイズなどの問題が深刻化している。しかし、人の移動と経済発展は表裏一体の関係にあり、移住は今後も止められない勢いで発展していくだろう。

発展途上国であるベトナムの都市化は工業化や観光開発の拡大に伴って増え続ける下水・排水量に対して、処理能力が絶対的に不足している。さらに、下水のほとんどが河川に直接排出され、水環境の汚染が深刻化しているとの現状も見られインフラが問題視されている。

6. 都市化

都市化が進行しているベトナムでは経済が発展し、生活水準も上がっている一方、貧困の差がより開いてしまっていると感じる。住民票を持ち、国の教育を受けられている人たちの識字率や就学率は上がっているが、その統計に入っていない不法滞在者の生活環境は劣悪だ。急激な都市化を防ぐために転居の自由を制限しても少しでも良い生活を求めて農村から転居する人たちがいる。彼らは不法滞在者となり、密かに暮らしていくしかないのが現状だ。大気汚染、浸水、騒音などから逃れるすべがなく、電気や水道も隣家から買い取ったり引いている。それらの子供たちは学校に行けないまま大人になり、きちんとした仕事に就けず、またその子供も学校に行けないという悪循環である。また、彼らは日雇いの仕事で生計を立てているため、仕事の安定性に欠き、それが生活の不安定につながっている。統計に入っていない不法滞在者が年々増えて着るため、ホーチミン市などの都市部の人口増加は著しい。それがインフラ整備により時間をかけていると言えるだろう。都市化計画の中にインフラ整備はもちろん入っているが、円滑に進められていないのが現状だ。技術面や経済面も含め先進国が協力する必要がある。都市化といっても環境だけでなく精神的豊かさ要素の一つと言える。民族、伝統、宗教などの文化に加え地域の団結や自然環境との調和、さらに社会的思想の再構築が必要だと言える。上層部と下層部美よる整合性を持った管理のために地域のコミュニティを都市管理に参加させることで安定を図るべきである。

7. ヘルスケア

ベトナムの RH 関連の主な指標はアジアの他の途上国に比べて比較的良い。1990 年代後半から RH 全般の問題に目が向けられるようになった。保険医療制度の一環として各社に2、3 年の専門教育を受けた補助医師、中級

看護師・助産師または4～12ヶ月の教育を受けた初級看護師・助産師というスタッフが6人配置された保健所が設置された。政府は医師も配置しようとし補助医師を4年間再教育し医師に昇格させる対策をとっているが質が問題視されている。保健所の地域格差も大きく、平野部では保健所が比較的身近にあり、妊婦健診のために保健所を訪れたり、出産も施設分娩を選ぶ人も増えている。しかし山岳地帯には気軽に行ける距離に保健所があまりなく、出産に危険を伴うという認識は持っていますが、保健所に行くまでに生まれてしまったり、急変した場合はさらに遠い保健センターに行かなければならないため、自宅出産する人が多い。また、ベトナムは子供が1、2人という少数家族を推奨していて地域によっては3人産むと罰を与えられることもあるため、女性の中絶数の増加の原因となっている。現在、出産可能年齢の女性の3人に1人が中絶経験を持つと言われている。国家的にも中絶は合法とされ家族計画の一つとして軽く考える人が多い。また、ベトナムは「薬剤師診療」が発達している。街に散在する薬局に「小さな診療所」の役割を求めていることで薬剤師は、患者の症状を「診て」、知識と経験をもとに薬を「処方」している。薬はOTCに限らず、医療用医薬品でも、医師の処方なく提供する。患者の支払い余力も考慮し、箱単位ではなく、1錠単位で患者に販売しているところもある。医師の先進国への留学も増えているが、格差が激しく、さらには人員不足なので、先進国も協力のもと海外への留学制度の充実や国内での医師教育の質の向上などを図る必要がある。

8. 家族

ベトナムの家族構成は祖父母、父母、子供の三世代である。家族や地域社会の年長者は知恵のあるものだと思われ、彼らの意見は尊重される。家族の間ではいつも緊密に連絡を取り合い、遠く離れている場合は定期的に電話をかける。何事も先祖のおかげという強い思いがあるので、死者が葬られている一族の土地に執着する。経済的にも、お金を与えたり、品物を買って送ったりして互いに助け合う。自ら進んでそうするというより、それが一種の義務である。家族や地域社会への所属意識は、必然的に社会への調和を維持することに重点を置く。そのため全員の同意が常に優先され、個人による意思決定が避けられるのである。ベトナムでは、結婚しない、子供がいないということは悲劇だと考えられてきた。子供が夫婦生活で一番重要なものだ。そのため妊婦は、妊娠一か月を過ぎると流産を用心して旅行しない。子供はみな一生懸命に働くものとされている。子供は小さい時から家事を手伝う。男子も女子も料理や洗濯をし、母親が働いている間は幼い弟や妹の世話をする。幼児のしつけは年長の男子の責任で、弟や妹の宿題を見てやるのも彼だ。また長男は、家族全員の経済生活にも全面的な責任を負い、年老いた両親の面倒を見たり、祖先を祀ったりしなくてはならない。ほかの兄弟姉妹も、老齢の両親のためにお金を出し合って援助する。

家族の面倒を見るのは基本的に母親である。買い物をしたり、家庭内の雑事をかたずたりする。男性たちには暇な時間が多く、父親はその時間の相当の部分を、子供の宿題を見てやったり一緒に遊んでやったりして過ごす。多くの女性が雇われているのは、稲作や家畜の飼育といった肉体労働も含めて、賃金の低い仕事である。

ベトナムでは家族の結束が日本以上に強く、特に先祖や親といった年上のものを極めて大切にすることが分かった。子供がみな一生懸命に働かなければならないといった風潮は日本にはないものだ。社会では男性の立場が強いが、家庭内では母親の立場が強くなるという事実に興味を持った。

9. 階層分化

ベトナムの農村で土地革命が激しさを増したとき、「成分」と呼ばれる階級があった。「地主」「強豪」「中農」「貧民」「雇農」である。搾取の程度において階級が設けられ、革命幹部は中農以下の出身出なければならなかった。そして、革命運動成功の背景には、厳密な「成分主義」を取らず、学歴もあり知識豊富な人々の民族意識を集結させ、抗仏・抗米戦争を戦い抜いたことが大きい。

ドイモア以前は、官僚、教師や医師などの知識層は、名誉や威信の象徴になっても、能力がそのまま所得に反映されることはなかった。一般社会のレベルでは教師や医者でもアルバイトをすることで生活費を稼ぐことが日常化していた。つまり、戦時中に形成された国家統制システムの下では、一部の高級軍人やエリート官僚は別として、学歴や能力の高さに応じた職業選択や社会経済的上昇は大きく制限されていた。しかし、ドイモア以降、外国の民間企業が若くて専門知識のある大卒エリートを雇用し始めると、合理性と能力主義が前面的に押し出されるようになった。そのため、ベトナムの若い技術者は、高給職につくため、技術や語学の夜間学校に通い、大学進学塾も隆盛である。

一方、農民から職を求め都市に流入する人口も増えた。彼らに理由を聞くと、資本主義的な経済感覚に慣れたホーチミン市ではバイクやタクシーも一つの経済活動にすぎないが、ハイノでは卑劣的な扱いを受けることが多く、地方農民出身者への侮辱意識を感じるからだという。

また、市場顕在化のインパクトは子供たちにも大きな影響をあたえている。経済的な理由で「失学」いた子の大半は、新聞・ポストカードを売りお金を稼いでいる。

この問題に対して、最底辺の階層が直面する深刻な貧困問題を、社会問題として取り組む NGO 団体も登場している。今後、経済成長を続ける過程で、格差は増していく。その中で、階層を越えた「市民社会」の形成が大切になるのである。

10. 社会悪

2001年日本人男性が、当時14歳のベトナム人少女を売春したとして、児童買春・児童ポルノ禁止法違反で逮捕された。この事件が象徴しているのは、負の一面である。ベトナムの都市部では、「カラオケ」、「バー」、「ビア（ビアホール）・オム」、「カフェ・オム」、「カットック（理髪店）・オム」、「マッサージ」など、現地民、観光客、両方に向けての売春宿が増えている。2002年にはベトナム全土で、五万人の売春婦が確認されている。そして、ベトナム人女性は国境を越えた人身売買の対象にもなっている。中国では、一人っ子政策により女性不足から嫁がいらない！という問題から、ベトナム人女性が一人40万円で売られる。また、その殆どが人身売買の知識のない貧民である。

このような売春の増加は、エイズ患者の増加をもたらしている。累計感染者は5万6495人（2002年10月）といわれているが、実態はつかめていない。

さらに、ベトナム政府は、売春、犯罪、麻薬の目指した「三のない運度」をおこなっているが、なかなか効果を挙げていない。また、これらが、少数民族の移住地域にまで及ぶことが懸念されている。

外国人が宿泊する安宿町では、比較的簡単に麻薬が購入できる。外人を狙った、スリ、引ったくり、置き引き、売春の絡む犯罪がふえている。売春、麻薬、エイズなどは、人の移動に伴いさらにぞうかする。社会悪に立ち向かうために、ベトナムは一国レベルではなく、国際的なレベルでの対応を迫られている。

参考文献

- クレア・エリス『カルチャーショック 07 ヴェトナム人』河出書房新社 1998 年
- 坪井善明『アジア読本 ヴェトナム』河出書房新社 1995 年
- 穴吹允『ベトナム人と日本人』凸版印刷株式会社 1995 年

4. 村と村人

1. ベトナムの2つのデルタ

ベトナムの北部と南部には“紅河デルタ”と“メコンデルタ”がある。デルタは別名を三角州といい、河水に運ばれた土砂が河口に堆積してできた三角形の地形のことだ。二つのデルタには様々な相違点があるが、デルタでは集約的な農業生産が行われ、古くから人々の集落が形成されてきた。また、生産性が高く、重要な穀倉地帯となっており、多くの主要都市もデルタの上に位置している。北部平野に注目すると、定住生活が行われるようになったのは約四〇〇〇年前のことだが、それからの長い歴史の中で人々は、集落や耕地を洪水から守るために囲んだ堤防である輪中を作るなどして、紅河平原の自然環境を人工的に改変してきた。輪中堤防の形成は集落の性質にも影響している。紅河平原の堤外地は商業拠点、窯業生産地などに利用されていることが多いのだが、これは舟運による原料や製品の運搬利点に関係している。このように、ベトナム北部に広がっている大きな平野では長い時間を掛けて輪中地帯や密集型集落が形成され、その集落ではその土地や歴史独自の文化が出来ているのだ。

2. ターイ族の暮らし、民族雑居

ターイ族はタイ系民族で西北地方や北中部の山間部に住み、比較的大きな人口規模をもっている(図1)。盆地で水稲稲作を行い、豊かな者が多い。そのため、地元の省や県の権力機構を握っているケースは珍しくない。伝統的な高床式住居が並んでいる(図2)。ターイ族の人たちは、米、薪、キャッサバなど現金に変えられるものは全て売り、

生活は貨幣経済に組み込まれている。薪を町のキンに売って小銭を稼ぐのがタイの女性たちの日課である。昔ながらの伝統を守りつつ、織物製品や布製品を作って生計を立てている。

黒タイ族の女性は結婚すると髪の毛を頭の上に大きなお団子のように丸く結う(図3)。



【図1】



【図2】



【図3】

3. ベトナム北部中部の比較

ベトナムにおいて北部に位置するトンキン湾は大陸棚になっている。

大陸棚というのは海底の傾斜がなだらかで浅い海のことだ。(図1参照)

技術が発展していなかったはるか昔においては季節風までもなびくこの大陸棚から良質な魚を大量に捕ることは厳しかった。なので、北部の人たちにとってトンキン湾は恵みが少なく危険な海となされていた。補足をしてくと、このトンキン湾は後にベトナム戦争発端の地としても知られている。

1009年～1225年において李朝がベトナム北部を支配していた時代において、人口増加の為に南進をする。南では海上貿易を多く行い栄えることに成功した。日本含む東南アジアにもその美しい漆器等(図3参照)を輸出していた。

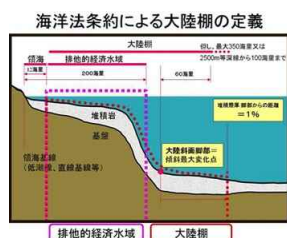


図 1



図 2



図 3

4. 昔の農村の生活

十八世紀～十九世紀のベトナムの農村地域では、首都であったハノイ近郊においてすでに稲作農業以外の主要な生業を持っており、農民の家計はそれらの農外収入によって支えられていた。主要な河川や道路沿いの地域には、様々な特産品を製造、販売、運搬する

「職業村」と呼ばれる手工業や商業を生業とする村落が多数存在していた。特筆すべき点は村ごとに全く異なる産品を製造していたことである。1つの特産品の原材料調達から製造販売までの全てを、1つの村の中で行っており、特に伝統技術を必要とする製品を作る村では技術の流出を防ぐため、婚姻を村落内の人同士で行うなどしていた。よって風習や文化が守られ、村全体が血縁組織のような状態になることで村の生業を存続させていた。このような「職業村」の特徴が村人同士の強力な共同意識と排他的な村同士の競争意識を生み、多様な産品の存続と農外収入の確保を可能にした。その後商業活動が活発になり、消費市場と生産地の農村との間を取り持つ流通に関する役割を果たす「商業村」が発達した。その後 1958 年～1988 年の農業集団化時代の影響により自由な商売活動が規制され、農民は村を離れることが困難になり商業村は取り締まりを受けるが、1988 年 4 月頃から、経済開放が本格化するとそれらの「商業村」の経済活動も再び活発化していった。

5. ベトナム中部の世界遺産

ベトナム中部には三つの価値のある世界遺産が存在する。

一つ目は「ホイアン歴史地区」。今から 400 年前の江戸時代にオランダ東インド会社の商館が設けられたことでホイアンは西洋と東洋の貿易拠点となっていた。1999 年に街自体が世界文化遺産に登録され、特にこの中でも有

名な来遠橋は、当時形成された日本人街と中国人街の架け橋で、現在は観光客が多く訪れる観光地として名が知られる。(図1)

二つ目は「フエの建造物群」。フエはベトナムの最後の王朝であるグエン朝の都で、ベトナムの京都と言われる程のどかな街だ。1993年に世界文化遺産に登録され、ベトナムの建築様式を使用しつつ、中国の建築様式や曲線の多い装飾が施された建築様式であるバロック様式も使用したことで、当時中国とフランスの支配をされてきたベトナムの歴史を感じる。しかし、ベトナム戦争の激戦区であり、建造物がほぼ破壊されたことで現在も復旧中である。(図2)

三つ目は「ミーソン遺跡」。2世紀から17世紀にかけてインドと中国を結ぶ交易ルートの中継地として栄えた海洋国家であるチャンパ王国の聖地だ。1999年に世界文化遺産に登録され、建築はレンガ積みのみで形成し、チャンパ王国を築いたチャム族の技術性の高さが見受けられる。また、当時中国の影響があり、そのイメージから脱却するためにインドの文化を取り入れ、ヒンドゥー教を信仰していた。フエ同様、ベトナム戦争の被害が大きく、現在も復旧中である。(図3)



(図1)



(図2)



(図3)

6. ハノイとホーチミン市

ハノイは紅河の右岸にあり、国内の工業の中心地で、農産物の集散地ともなっている。2009年のハノイの平均年収は、3180万ドン(約13万円)で、ベトナムの平均年収の1930万ドン(約8万円)より65%程水準が高い。ハノイ36通りとは当時この一帯は36の組合によって支えられていた。銀を売る店、線香を売る店、漢方を売る店、金物屋、ブリキ製品、竹製品、など。その36の組合からなる旧市街を、近現代に入ってから「ハノイ36通り」と呼ぶようになった。ただし、これは外国人の間での呼称で、ベトナム人は旧市街という意味を持つ「フォーコー」と呼んでいる。

ハノイのナイトマーケット

旧市街で行われるナイトマーケットは、ハノイ最大のナイトスポット。営業時間は毎夜ではなく、毎週末。金曜から日曜にかけての3日間のみ。南のハンダオ通りからずっと一本道に沿ってお店が並び、ドンズアン市場まで続く。夜の18時半頃から、24時頃までやっているほか、ドンズアン市場周辺は深夜2時まで営業している屋台や食堂も多数ある。

サイゴン・ホーチミン市の建物

1965年のアメリカ正規軍の本格参戦によって、ベトナム戦争が本格化する。

1973年のパリ協定締結後、アメリカ軍の全面撤退以降は徐々にベトナム共和国は劣勢に陥り、1975年4月30日ベトナム戦争が終結した。その後サイゴンを始めとする南ベトナムはベトナム人民軍の支配下に置かれ、社会主義化されると経済活動は停滞し、これを嫌う華僑を中心に、難民が流出した。1976年、共産主義の統一国家ベトナム社会主義共和国が成立した。だから、今日でも、この街の都心部には広くて優雅な並木道が走り、歴史的なフランス植民地風の建物が並んでいて、町並みに彩りを添えている。この街の中心部で最も目立つ建築物といえば、市営劇場、革命博物館、市人民法廷、ノートル・ダム大聖堂である。

歴史的要因で、ベトナムの料理を提供する以外に、フランス料理や日本の寿司、テキサス風バーベキューからケンタッキーフライドチキンのようなファストフードまで、地元以外の料理を味わうこともできる。また近年は、市内中心部の大規模ショッピングモール内にフードコートが多数営業している。



図1 破壊されたマングローブ林(1)

参照：沖縄・ベトナム友好協会 <http://www.oki-viet.org>
(観覧日：11月13日)

7. カンザーマングローブ生物園保護区の概要

カンザーはホーチミン市の南約60kmの海岸地区に位置し、総面積は75,740haです。この地区での植林活動や事例研究が認められ、1992年にベトナムの環境保護林に指定され、2000年には、ユネスコの生物園保護区に指定されました。

歴史について

戦後復興や人口増加に伴う建材、燃料などの確保や堤防建築、塩田の開発などで、戦後のマングローブ林の破壊(図1、図2)も急速にすすみ、80年代からベトナム政府が外貨獲得のために奨励したエビ養殖の影響もマングローブ林の破壊に拍車がかかりました。ホーチミン市行政による厳しい保護・管理下に置かれていたカンザーのマングローブ林は、世界でも数少ないマングローブ林回復・保全の成功例として注目を集めてきた。森林が回復するにつれて一度は姿を消していた猿やカワウソ、フクロウなど森の小動物たちが戻り始めた(図3)。



図2 破壊されたマングローブ林(2)

参照：あすをともし森づくり <http://www.astomos.com/mori/manglobei.html>
(観覧日：11月13日)



図3 森に戻り始めたサル

参照：一般社団法人 J&A 国際交流振興会議 <http://janda.or.jp/square.html> (観覧日：11月13日)

5. 農業国から工業国へ

1. 社会主義市場経済

1990年代の成長は著く、GDPは平均約8%も伸び続け、貿易額は約七倍に拡大した。全国民に占める貧困者の割合は三割弱まで下がり、90年代初頭に比べ半減した。発展の背景を解くキーワードが「社会主義市場経済」である。ベトナム支配政党である共産党は、政治面では「社会主義」の看板を掲げており複数政党制も認めていない。だが、経済面では「市場経済」を導入し発展に役立てる姿勢である。「社会主義市場経済」は経済成長の原動力となった。ベトナム経済は90年代に高成長軌道を歩み、共産党は1996年の第八回党大会で「経済的・社会的な恐慌状態から脱した」と危機克服を宣言した。同時に工業化・近代化を加速する方針を示した。ベトナム共産党は、ドイモイを決めた1986年の第六回党大会で「社会主義実現に至る過程は長い道のりで当面は民間企業や外資など資本主義的な要素を導入することに問題ない」との認識を示した。1992年の国会では「ドイモイ憲法」と称される新憲法を採択し、市場経済導入、民間企業設立、外国企業との合併などを認めることを明らかにした。

共産党の一党支配こそ譲らないが、経済発展のために「使えるものは使う」という現実的、実利的な態度を示したのである。

2. 全方位外交

ベトナム外交の基本方針とされるのが、全方位外交である。これは、世界中のあらゆる国と分け隔てなく付き合い、経済開発や安全保障など国益の維持・拡大に役立てようといった政策である。いわば「世界中の国々と友達になろう」という方針である。

1990年代半ばまでにまずは、貿易や外国企業投資の拡大をはかった。1990年代後半からは、ベトナムは各国との関係をさらに深め、国際社会に一段と関与することとなった。課題としては、域内関税の引き下げ、産業・貿易・金融でさらなる規制緩和と市場開放が求められた。

2005年以降は、WTOに正式加盟、国連安保理の非常任理事国選出、ASEAN首脳会議の議長国など、国際社会においてさらなる発展をしてきた。

表1 ベトナムの外交政策

年代	外交政策
1986年	第6回党大会においてドイモイ（刷新）政策が打ち出される
1991年10月	カンボジア和平パリ協定
1992年11月	日本の対越援助再開
1995年7月	アメリカとの国交正常化
1995年7月	ASEAN正式加盟
1998年11月	APEC正式参加
2007年1月	WTO正式加盟
2008--09年	国連安保理非常任理事国（初選出）
2010年	ASEAN議長国
2014～16年	国連人権委員会理事国
2017年	APEC議長国

ベトナムは1990年代から急速な経済成長を遂げてきたものの、この経済成長は、急速な物価上昇や対外債務増大の懸念を膨らませている。今後の課題としてはマクロ経済の安定化、インフレ対策が最重要だと考えられる。現在、ベトナムは2020年までに近代工業国家として成長することを掲げ、引き続き経済成長に力を入れている。

3. 貿易構造の多角化

ベトナムは、1975年の終戦以後、特に78年のカンボジア侵攻後、中国との関係が冷え切ったことで旧ソ連や東欧諸国との関係緊

密化が顕著になっていった。そして、ベトナムは貿易、経済協力両面で旧ソ連・東欧諸国に大きく依存することになったが、90年以降相次いで東側諸国が崩壊したことでベトナム経済はその拠り所をも失った。そこでベトナムは、日本、シンガポール、米国などの西側諸国に活路を求めざるを得ず、輸出先のシフトに動き始めたのである。しかし、輸出品といっても付加価値の低い軽工業品や農水産物しかもたないベトナムにとって新規市場の開拓は容易でなかったが、その時期にちょうど原油の商業生産が本格化してきていたため、西側諸国への原油輸出が増加していった。旧ソ連が抜けた大きな穴を原油という有望輸出品で多少なりとも埋め合わせることができた。

ベトナムの輸出品は、原油、水産物、軽工業以外の輸出品はほとんどが農産物である。一次産品輸出、工業製品輸入という典型的なモノカルチャー貿易構造は現在も変わっていない。主要輸出品は、原油、縫製品、水産物、履物類であり、輸入品は、機械と設備類が多い。

ベトナムが今以上に成長するためには、輸出品を一次産品から工業製品へと変化させることが必要となってくる（高付加価値化を進める）。そのためには、輸出加工型の外国投資企業の誘致を進めることが必要である。そして、自由競争によって流入してくる安価で良質なもののから国内産業を保護し、育成を進めていくことが重要である。

4. 成長の主軸・外国企業

ベトナムは1975年にベトナム戦争が終結して南北統一を成し遂げ、旧ソ連をモデルとした社会主義経済を採用してきた。これによって、近代的な産業基盤設備が遅れ、工業の屋台骨とされる国有企業は余剰労働力と老朽化設備を抱えて採算が悪化した。90年代初頭にタイ、マレーシア、インドネシアなどへの直接投資が一巡する中、新たなベトナムが「アジア最後のフロンティア」として関心を集めたのである。投資家はベトナムを好意的に受け止めて、日本企業だけでなくシンガポールや韓国、台湾企業の間でも「ベトナム投資ブーム」が沸き起こった。ベトナム投資ブームの背景には①天然資源が豊富②人口が多く将来市場として有望③勤勉で低廉な労働力の宝庫、が挙げられた。

ベトナムの日系製造業の約八割は1996年以降に操業を開始した若い企業であることが特徴である。操業後間もない時期にアジア経済危機による市況の低迷に直面し、2000年頃までは赤字を計上した企業が多かった。2001年頃から生活活動も軌道にのり、市況も回復してきたことからベトナムの日系企業はようやく本格的な成長期に入ったといえるだろう。ベトナムは中国とASEAN両市場を視野に入れた低コスト生産で有力な輸出拠点となる可能性を秘めている。

5. 農業国としてのベトナム

ベトナムにとって農業は、国内総生産の約二割を構成し、就業人口の六割を占める重要産業である。農業生産高の六割が穀物を中心とした食糧生産で、中でもコメが約九割を占める。しかし、急激な社会主義化によってベトナムには農業生産が激減した。食糧自給もままならない非常事態を開拓するために、合作者による集団化を改め、家族経営を奨励し、余剰農作物の市場価格による自由売買を認めるなどという政策を出した。そして、ベトナムの農業生産高は飛躍的に向上したのである。コメ以外ではコーヒー、ゴム、ナッツ類、茶などの輸出作物の生産も伸びている。商品作物は国際相場の乱高下に翻弄される上、ベトナム産は品質が安定しないことから他国産と比べて安価で取引されているのが実情である。そのため、ベトナムには、品質の向上と加工レベルの高度化が求められる。また、政府の他の主要輸出国との交渉などのバックアップなども必要である。

6. 工業化

・ベトナム経済力の概要

1986 年、第六回党大会において採択された市場経済システムによって各国(日本含む)と連携をとりはじめた。ドイモイ(刷新)を中心に国際競争力を強め、企業を拡大させている。成果を見せ始めたのは 1995、96 年頃で、その頃からベトナムは経済面において急成長をとげ、2007 年には WTO 正式加盟も果たした。

・なぜベトナムで「工業化」が進んだ？

従来まではセメント、鉄鋼、石炭などの基幹企業を国有企業が独占していたため、世界と比較した際、競争力の低さが目立った。さらにそれに加えて、90 年には企業の廃止、統合が行われ約 1 万 2000 社あったものが約 4300 社まで整理された。こういった企業の激減により、余剰労働力があふれ、新たな雇用先が必要となった。そこで、のちにだされた新会社法(2001 年)をきっかけにして、多くの新規設立企業が増加した。おもに縫製業、建築業、食品加工などが力を有した。

・「持続的」に成長させていく必要性

高成長をとげた多くの企業は存在するものの、株式化に踏み切れない会社も多く存在するため、当面の間は自動車、家電を中心としたグローバル市場で力を持つ、外資企業が中心となるだろう。

7. 交通運輸・通信

ベトナムでの交通手段といえば、バイクである。2005 年の時点でベトナム全土におけるバイクは推定1千万台。この現状は非常に危険である。2001 年の事故件数は 25000 件を突破し、死者数は年間 1 万人に及んだ。そのうちの 6 割がバイクによるものである。

ベトナムの交通整備は遅れている。地下鉄、近距離電車、路線バスは盛んではなく、自動車となると高価で手に届かない。道路は大半が農村道路で、質の改善が遅れている。鉄道は複線化が遅れており、信号システムは旧式製、踏切は手動で操作する係員が配置されているほどである。航空においては、「二重価格」が長年問題視されてきたが、2004 年に撤廃された。通信においては、2011～2015 年の統計によると携帯電話サービスの需要はさらに拡大し、普及率は 100%を超えている。国際通話料金が低いとして非難されていたが、2003 年に引き下げられ、ASEAN 諸国の平均並みとなった。

交通運輸・通信において、ベトナムの経済成長に伴い大きな変化が生まれると考えられる。都市化が進み、都市の人口増加や経済成長が進む中で、ヒトとモノの移動はますます活発化する。それに伴い道路や鉄道における交通整備にいち早く取り組まなくてはならない。経済発展、国際社会への進出はベトナムをより活発にされるためこれらの変化が欠かせない。

8. 豊富で優秀な労働資源

日本ではベトナム人労働力が注目されている。日本でベトナム人労働者が重宝される理由の一つに、記憶力、活動速度の良さがあげられる。さらに、安い賃金ですむことも日本企業からしたら大きな魅力の一つである。教育の時間が必要になることはさけられないが、週四、八時間労働、年300日以上働くことが基本のベトナム人は日本企業にとっても好都合であった。

加えて、少子高齢化の日本とは真逆の人口構成をなしており、34歳以下が全体の65%を占めるため、豊富に若い力が存在する。こういった点から、ベトナム人は今、多くの国から豊富な人材のある国として注目を浴びている。

9. 現代のベトナム人～消費性向と商業組織～

ベトナムではテレビは 500-600 ドル以上、バイクは人気ナンバーワンのホンダで 80 ドル以上する。所得水準を考えれば決して安くはないが、ベトナム人は副業からの収入や、日本の“講”に似た相互扶助知識からの借り入れなども原資にして、少々背伸びをしても“いいもの”を買う。

“いいもの”に憧れる消費性向とは？

ブランド信仰の強さを表す。しかし最近では中国から安値の商品が流入し変化の兆しがみられるが一方で、ひとにぎりのお金持ちは日本のそれや先進国にも劣らないほど豊かな生活をしている。

ベトナムの外国人観光客をターゲットとした高級レストランやカフェ、ヘルスクラブなどはベトナム人向けの店の 10 倍以上の料金を取るところもあり、こういったところの経営者が富裕層として育っていく。

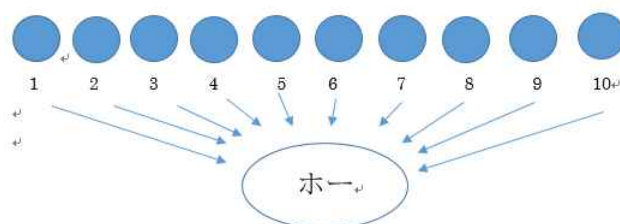
しかしいまだ多くのベトナム人が豊かな生活を夢見ながら安い給料でコツコツと働いている。そして、無駄な出費は抑え、本当に必要なものだけを思い切って買う密度の濃い消費スタイルを続けている。

また商業人の中で銀行代わりに使われているのは、“ホー”（南部ではフイ）と呼ばれる相互扶助組織である。

ベトナム版の“講”とも言える“ホー”は、商人にとって欠かせない資金調達・運用の手段として役立っている。ホーの組織は商売仲間 10 人が会員とする。基本は 10 日間が 1 サイクルである。毎日 10 万ドンずつ拠出する。（日本円にして 500 円）そして資金需要がある人から、毎サイクル末にお金をとる。10 サイクルが過ぎれば、全員がお金を取ったことになる。

“ホー”のメリットとは、複雑な手続きもなく便利であることだが、しかし反対にお金を取る順番が早いと受取額が支払額を上回り、遅いとその逆になる。国民が銀行と疎遠な中にあるのは市場経済の歴史が浅く銀行への理解がなかなか進んでいない上、社会主義体制下で当局に所得を補足されることへの警戒心も根強いからだといわれる。だからこそベトナムの小組織においてはこのシステムがはまっているのかもしれない。

政府は、国民の余剰資金を吸収するための「新たな器」づくりにも余念がない。



6. ベトナムの思想

1. ベトナムの民間信仰について

ベトナムは自然崇拝とシャーマニズムを基盤としている。そこにヒンドゥー教や仏教、道教、儒教などの外来宗教が融合し、ベトナム独自の信仰を形成した。またベトナムの民間信仰では多くの女神が信仰の対象として創造されている。これは女性に対し豊穡のイメージを抱いている点や強い女性の権利などが影響している。ベトナムは農業が盛んなことからこうした自然神を崇拝することは必然だといえよう。ベトナム人は、これらの神様を母親として考え、古代ベトナム人は、大自然を自分の母として信仰していた。

ベトナムにおける民間信仰で最も典型は聖母道（ダオマウ）である。この信仰の最高神は、道教の男神である玉皇上帝だ。しかし、実際に府と呼ばれる神界を統治しているのは聖母や公主という女神らである。女神はそれぞれ天・地・水・岳に分けられる 4 府を統治しており、それぞれ祭壇にまつられる。（画像：<http://vovworld.vn/ja-JP/ハノイ便り/民間信仰の一つ聖母道-286040.vov> より祭壇の様子）聖母道の儀式では、神霊と人間の仲立ちをする霊媒がいる。その霊媒の役割を果たす多くは中年女性である。霊媒は信者の求めに応じて信託を告げる憑依儀式を行う。その後霊媒は舞を踊り悩み事に託宣を下し護符や薬品、供物の分配を行う。この儀式は「レンドン」と呼ばれている。社



会主義政権下では聖母道は迷信であるとされ抑圧の対象であったが、現在ではしばしば行われており、伝統文化として再認識されるようになった。2016 年 12 月、聖母道信仰はユネスコの無形文化遺産に登録された。



(<http://vovworld.vn/ja-JP/ハノイ便り/民間信仰の一つ聖母道-286040.vov> より儀式の様子)

2. ベトナムのメディア

現在のベトナム人は活字メディアが大好きで、新聞や雑誌は人々にとって一種の娯楽になっている。その一方でお堅い新聞は敬遠されており、一紙あたりの発行部数が少ない。よって、この分野への単独投資は開放されていない。現在、ベトナムは共産党の独裁体制をとっているが、そうなる過程のなかで、戦争で重要な役割を果たしていたのが宣伝(プロパガンダ)戦である。これにより、新聞や雑誌はある意味で政党のものとなり、利敵行為につながる記事は一切認められなかった。しかし、1980 年代後半から役割が一変する。その契機は、1986 年のゲン・ヴァン・リン書記長によるドイモイ路線である。南北統一による混乱の中、リン書記長は新聞のコラムで腐敗や墮落に警告を発し、人民に依拠した新聞・雑誌作りに一定の方向性を示した。その後、一時期は新聞や文芸界に活況を与えたが、1989 年に天安門事件とベルリンの壁崩壊が起きたことにより、再びメディアによる力を抑制する方向に路線を切り替えた。同年 12 月に「マス・メディア法」が制定され、報道禁止事項が明記された。

欧米や日本で言われる「報道の自由」はベトナムには存在しない。憲法で言論の自由は保障されているが、マス・メディア法で「国家の安全保障を侵すものであってはならない」と限定されている。これに関連した事件として、1997 年 10 月に、『ゾアインギエップ(営業)』紙の編集長が逮捕されたケースがある。このような事件は、個々の新聞や記者の活動をより自己規制的なものにする。そこで、新聞各紙は「紙面研究会」というものを持っており、好ましい記事かどうかの線引きが行われている。これが事実上の「事後検閲行為」として機能している。

マス・メディア法による報道の制限は、ベトナムの新聞各紙を大衆路線に向かわせている。独立採算制の下で経営の安定を図るために、告発型調査報道で危険を冒すのではなく、スポーツや娯楽・生活関連をより多く掲載していこうというスタンスである。そんな中、当局が最も恐れているのがインターネットである。ベトナム政府は 1997 年 11 月にインターネット・サービスを解禁し、ハノイやホーチミン市ではいたるところでインターネット屋が誕生した。しかし、当局が目論んでいた接続サイトなどの規制はできていても、数ある有害ポルノサイトまでは手が回っていないのが現状である。



写真:ベトナムの新聞

3. ベトナムの音楽と演劇

ベトナムは「詩と竹の国」などと言われ、文芸活動が盛んな国のひとつである。中でも、ハノイの北東に位置するバックニン地方の「クアンホ」と呼ばれる民謡は宝庫と称されている。歌詞は恋愛を想起させる内容が多い。



他に、中部や南部を代表する民謡「リー」や、集団労働の掛け声に源を発する「ホー」、祭礼・祈祷の際に歌われる「チャウヴァン」、「ソアン」、盲目の龍狼の芸人により歌われた「サム」など、ベトナムは民謡歌謡が非常に豊富である。宮廷では「ニャーニック」という音楽が演奏されていた。最近ではV ポップと呼ばれる軽音楽も盛んである。

伝統的な演劇については、音楽と舞踊の要素を内包する歌舞劇であり、「チェオ」という歌舞劇が長く農民自身による娯楽の位置を占めてきた。台詞にはメロディーを伴わない語りと歌唱が現れ、メロディーには一定の約束がある。宮廷では「トゥオン」という演劇が演じられていた。動作や化粧、装身具などは中国の戯劇に通じる特徴であったが、音楽面ではベトナムの要素を強く持っている。

水上人形劇「ムアゾイヌオック」は、ベトナム独特の芸能として注目されており、北部平野地帯で演じられてきた農村の民間芸能で、ため池などに舞台を組み、水を最大限に利用して多彩な動きを演じるなど、一貫したストーリー展開はないが、躍動感のある魅力的な集合体である。これは今日でも韓国資源として大きな役割と果たしている。



写真:ベトナムの水上人形劇

4. ベトナムの宗教について

ベトナムは多宗教の国であり、他の宗教に卓越した「国教」的存在の宗教がありません。ベトナムでは宗教と信仰に分けられていて局による宗教管理がおこなわれています。宗教は、超越者への信仰と儀礼体系や道徳的倫理体系、及び教団組織を有しているものであり、仏教やキリスト教などが相当します。それに対して、信仰はより広い意味を持ち、宗教的内容を持っているものの特定の宗教に含まれないとか、完備した宗教レベルに達していないなんらかの信念を示すものに用いられています。行政的には宗教は政府宗教委員会信仰に関しては、文化情報省が主にかかわっています。ベトナム政府による調査で人口のうちおよそ7割が無宗教であるという結果にました。日本人と同じように自分が何かをしっかりと信仰しているとはいえない曖昧な宗教感覚が生きていると言えます。その中でも現在ベトナムには公的に認められた宗教が6つあります。仏教、カトリック教、プロテスタント教、イスラム教、カオダイ教、ホアハオ教です。カオダイ、ホアハオはベトナム独自の宗教でいずれもフランス植民時代の大戦間期に誕生した宗教です。

カオダイ教はゴミソチュウによって1919年創設されました。大道三期普度などを唱える混淆的性格の強い宗教です。信者は基本的に白いアオザイを身にまとっています。この一つのマークがカオダイ教のシンボルです。天眼と呼ばれていて宇宙の原理を意味しているそうです。ホアハオ教はフィンフーソーによって1939年に創設された在家仏教運動です。しかし、1975年に教祖が殺害されてしまったため現在は活動停滞気味であるそうです。



ベトナム海外研修活動報告

研修1日目:最上 彩瑚・小堺 和

・機内食:1日目の初めての食事は機内食だった。和食と洋食が選べて私は洋食を選んだ。内容はメインがビーフ煮込みと野菜の盛り合わせ(ブロッコリー、にんじん、じゃがいも)、シーフードマカロニサラダ レモン味(サーモン、エビ、イカ入り)、白パン、デザートは、フルーツ(オレンジ キウイ メロン イチゴ)とオレンジ風味のクリームケーキだった。私自身、機内食を食べる事が初めてだった為、予想以上に美味しく感動した。デザートが2種類あった事が 豪華だなと感じた。



写真1 機内食



写真2 ホーチミン

・ホーチミンの第一印象:約7時間半の旅を終えてベトナムに着いた瞬間、急に暑さを感じた。私はヒートテック、ニット、薄手のコートを着用していたがすぐに脱ぎたくなる程だった。ホーチミン空港は日本の空港と違って飲食店が外にあること、またツアーのガイドさんなど大勢の方が出待ちをされていて驚いた。バスに乗り市内を見てみると、とにかくバイクが多く意外にもビルなどの高い建物が多く並んでいた。空港の周りは基本的に田舎なイメージがあったがホーチミンは最初からお店が建ち並ぶ大都会だった。私達の中でベトナムに対するイメージが変わった。バイクに乗っている人を沢山見たが、多くの人がマスクをしていた。マスクもただの白いマスクではなく、カラフルなデザインのマスクだった事が印象的だった。

・ベトナム戦争証跡博物館

今日のメインはベトナム戦争証跡博物館に訪れる事だった。一時間半の見学で正直な感想としては時間が足りない、もっと事前に学習をしていたら知識がより深まっただろうと感じた。3階まであるこの建物は、下に降っていくと順番に歴史が観られる様に各部屋が数字で分けられていた。まず始めにベトナム戦争が始まったきっかけから写真と英語で綴られていた。最初は権力者や兵士達の写真から始まり、まだその悲惨さが分からなかった。しかし、枯葉剤でマングローブが一斉に枯れた中、幼い男の子が立っている姿の写真を見て枯葉剤の恐怖が分かってきた。ベトナム戦争の被害者は農民が大半だった。米兵にとって農村は敵な為、そこに住んでいる農民ももちろん敵ということになる。特に印象的な写真は、米兵に追いかけられ必死に逃げる農民の写真であった。すぐ近くまで銃を持った敵に追いかけられる恐怖、必死さが、その農民の顔からすぐに分かる写真だった。また、母親が負傷しすぐ側でその家族が泣きながら母親を見つめている写真も印象的だった。戦争中は父親が兵士などで家にいない為、母親が一家の大黒柱だろう。そんな母親が負傷してしまい動けずにいる。しかし、幼い子ども達や年老いた祖母はどうすることもできない。ただ、泣きながら母親が弱っていくのを見守ることしかできないのではないだろうか。この写真を見て、痛いほど子ども達の気持ちが分かったし、私自身の家族のことも考えた。この写真が撮られた後、この家族がどうなったかは分からないがどうか平穏に生きて欲しいと願った。

また、沢山の写真を見ていてベトナム戦争は枯葉剤による後遺症が酷いという印象を受けた。有名なベトナム戦争による後遺症の被害者といえばベトちゃんドクちゃんである。しかし、それ以外にも様々な後遺症があると知り衝撃を受けた。鼻がふくれあがる人の写真、発疹が背中や顔中にある人の写真、足が短く手が変形している人の写真、顔が複数ある赤ちゃんの写真、目が飛び出ている赤ちゃんの写真と、とにかく沢山の後遺症がある事を

知った。沢山の写真を見ていく内にホルマリン漬けにされている奇形児も見ることができた。見てみると顔は安らかに眠っていてどうかそのまま成仏できますようにと祈った。色々な写真を見ていて正直日本では考えられない様な後遺症ばかりなため、見ていて目を塞ぎたくなる写真もあった。だがこれらを見る事で、五体満足である事に感謝をもたなければならないこと、戦争は命を奪うだけではなく「後遺症」という生きている人に対しても苦しめるものを残すのだということを改めて認識できた。

最後に外に出てみると実際の刑務所が再現された場所に入ることができる。入ってみるとギロチンがあることに驚いた。ギロチンといえば中世のヨーロッパに使われているイメージがあったため、この時代に使われていることが意外だった。再現しているとはいえ、ギロチンがある部屋の雰囲気はどことなく重く感じた。実際にギロチンされた写真があり一瞬目を背けそうになった。アイロングリルというものにも衝撃を受けた。熱い鉄の上で人間にムチを打つ写真が近くにあった。打たれている人間は全身が火傷をしていてなるべく鉄に触れないようにもみえた。こうして刑務所をみてみると人間を人間として扱っていないことが悲しく怒りが出てきた。同じ人間なのに戦争というだけで人々の心を歪めてしまう。ここに閉じ込められていた人々に希望はあったのだろうか。家族や恋人がいる受刑者も大勢いたことだろう。いつか戻ると信じてどのくらいの人々が亡くなったのだろうかと考えると胸が痛くなった。

戦争は人々の心を歪め、人々の命を奪い、人々の未来までも変えてしまう恐ろしいものである。私達はこの事実をしっかり受け止め、後世に伝えていく義務があるのだ。今ある生活に感謝をしながら、平和な世界をこれからも続けていきたい。



写真3 戦争証跡博物館



写真4 ザボンサラダ



写真5 鶏のグリル

・夕食：1日目の夕食は戦争証跡博物館から15分程度にあるレストランでとった。この日のメインはハナ鍋である。ベトナム人でも中々予約がとれないらしく食べることは貴重だった。まずはザボンサラダ。海老と野菜とザボンが入っていてさっぱりした味付けだった。鶏のグリルは全体的にコリコリしていて油味が強かった。メインのハナ鍋の具材は海鮮、肉、野菜と沢山あった。野菜はニラの花、かぼちゃの花、テンリー、ソードゥア、シロゴチョウと日本では聞きなれない野菜ばかりだった。薄味で野菜や肉の出汁がとても美味しかった。デザートはフルーツだった。グアバは白く梨みたいな味で甘くなかった。グリーンマンゴーは固く酸っぱい味だった。マンはりんごの仲間であり梨みたいな食感だった。こうして1日目を終えた。



写真6 花鍋



写真7 デザート

研修2日目:福島 歩実・東原 咲

・ローカルな市場:閑静な住宅街に佇む、ホーチミンの路地裏のローカルな市場に行ってきた。市場では生鮮食品だけでなく、豆腐や揚げ豆腐などの加工食品、衣類やおもちゃなどの生活雑貨も販売され、美容院やエステなども並んでいた。生の鶏肉がパックに入れられてなく、そのまま売られていた。冷蔵庫に入れられていなかったが、その日に売り切れる量だけ捌いて、売れなかったものは破棄するそうだ。色鮮やかで大量の野菜が綺麗に並べられていた風景が印象的であった。市場の人々は皆友好的で様々な言語で私達に声をかけてきた。路地裏の市場では、観光地では味わえない人の温もりを感じることができた。



写真1 路地裏市場1



写真2 路地裏市場2



写真3 ライスペーパー

・チャンマン村で露干しライスペーパー:ベトナムでも珍しい湿っていて、食べ応えのあるモチモチ食感のライスペーパーを作りに行った。露干しライスペーパーの材料は、米の粉、麦、水、塩を混ぜて煮たものである。布を張った釜の上に、ココナッツの殻でできたお椀を二杯分敷き、薄く伸ばして蓋をする。竹の箸で丁寧に布からライスペーパーを剥がす。1枚あたりだいたい30秒くらいでできる。粬殻が燃料となっていて、釜自体はそれほど熱くはなかった。焼きあがったライスペーパーは、竹を編み合わせたものの上に置いて、天日干しをする。干している時に、ライスペーパーはパキパキと音を出しながら乾燥していた。一日で1000枚ほど作るそうだ。地元の方の手本を見た時は簡単そうだと感じたが、実際に体験してみるととても難しく、特に布からライスペーパーを剥がす時に破れてしまうことが多かった。失敗したライスペーパーはその場で丸めて様々なつけダレにつけて食べた。地元の方オススメのタレがしょうゆ、にんにく、唐辛子、レモン、砂糖、味の素を合わせたもので甘辛くて、モチモチとしたライスペーパーにぴったりでとても美味しかった。その他にも、メープルシロップや蜂蜜などもあった。

乾燥させたライスペーパーは釜でサクサクになるまで炭の上で10秒ほど炙る。炙ることでライスペーパーの吸水性を高める狙いがある。針金の先を丸くした棒でライスペーパーを挟み素早く返しながら炙った。焦がしてしまったり釜の中にライスペーパーを落としてしまうなど、こちらの作業もかなり難しく大量に炙るには熟練の技が必要だと感じた。中にはこの道30年と仰ってるおじさんがいた。失敗したライスペーパーはその場で食べた。食感はサクサクとしたスナックのようで味はかなり塩辛く口の中の水分が失われた。さっきまであんなにモチモチとしていたものが少し炙るだけでこんなにサクサクになるのかと驚いた。この炙ったライスペーパーを露が降りる早朝に干し露を吸わせる事で露干しライスペーパーが完成する。



写真4 生ライスペーパー



写真5 ライスペーパー炙り

・昼飯：昼ご飯は、そのライスペーパーで巻いた、生春巻きを食べた。豚肉や、きゅうり、もやし、酢漬けにした人参や大根、ドクダミ、パクチー、シソの葉などを包んでヌクナムにつけて食べた。ドクダミは香りがとても強く、一枚入れるだけで口の中全てがドクダミに包まれた。その後、バインカインと呼ばれる米粉でできたうどんのような物が出てきた。トッピングには豚肉や細かく刻まれたパクチーなどがのっていた。味付けはシンプルで、お好みでヌクナムに付けて食べた。



写真6 バインカイン



写真7 ライスペーパー

その後、ハンモックカフェで休憩した。屋外に屋根を設置したような空間にハンモックと簡易な机が用意されていた。ハンモックの寝心地はとても良く、半屋外の店内に吹く爽やかな風も相まってつい熟睡してしまった。ドリンクの種類は豊富で炭酸飲料やココナッツジュースなどがあった。私達はミルクコーヒーを注文した。ベトナムのミルクコーヒーは日本と違いコーヒーに練乳を入れたものだ。味はとても甘く濃厚で飲みごたえのある一杯だった。



写真8 ハンモックカフェ



写真9 アイスコーヒー



写真10 焼肉の野菜

・夕食：夜ご飯は、ヤギの焼肉を食べた。炭火で、甘辛いタレに漬け込んであったロースや胸肉、ドクダミや、シソ、完熟前のバナナ、スターフルーツ、オクラや空芯菜を焼き、ライスペーパーに包んで食べた。その後、ヤギ鍋を食べた。鍋からはみ出るほどの春菊などの野菜やヤギ肉、豆腐、ヤギの脳みそなどが入った。脳みそは、白子よりも滑らかになって、臭みがないような感じだった。食後にはベトナムのグレープフルーツ、ザボンを唐辛子塩をつけて食べた。



写真11 ヤギ肉



写真12 ヤギ鍋



写真13 ザボン

研修3日目：妹尾菜々子・塚本玲子

・ベンチェ省タインフー郡ルオンテーヴィン高校で学んだこと：まず、1班伊能さんチーム 4人ずつ、2班 huong さん 4人、3班タムさん 4人の3グループに分かれ、環境問題についてディベート形式で話し合った。それぞれの班の代表者が前に出て、体験した後の意見交換を行った。伊能さんが通訳して頂き、有り難かった。次に、高校内の有機学校菜園での経験（環境教育）について行った。



写真1 高校生



写真2 伊能さん

高校の敷地内にある野菜園を見学し、実際に匂いを嗅いだり、触ったり食べたりした。土もオーガニックの物で、牛の糞と水、枯葉などを混ぜて作られていた。自然な物から出来ていて、安心して食べられる喜びを知った。又、実際に食べたり匂いを嗅いで味わうことで、食のありがたみを感じられる良い機会に繋がったのではないかと感じた。これもフードコンシャスネスの授業と関連していることが分かった。



写真3 堆肥



写真4 畑



写真5 苗

・昼食では、野菜(高校の敷地内で実際に収穫した)を調理して、パインセオというベトナム風お好み焼きを作った。グループごとに分かれて、ベンチェ省タインフー郡ルオンテーヴィン高校生達と先生方と一緒に食事した。パインセオの生地は、ココナッツを乾燥させた物を布に包んで絞出した汁と米の粉、卵、ネギを混ぜ合わせて作った。ココナッツの香ばしい匂いがした。ネギは細かく包丁で刻んで入れた。最後に大きなフライパンで焼き上げ、焼き目がつくまで焼いた。それを大きなクレソンとミントに包んでヌクナムをつけ、味わった。高校生たちが非常に優しく、私たちのことを考えて、親切に食べ方を教えてくれた。ベトナム人の優しさを知った。



写真6 パンセオの生地



写真7 パンセオ



写真8



写真9



写真10 エビスープ



写真11 高校生

・ミトーでの経験：高速道路で移動し、小休憩をとった。(約 20 分程度ぐらい)とても静かで、周りが綺麗であった。ハスの花やピンクの花、黄色の花が咲いてある。トイレは綺麗。トイレトーパーあった。ミトーまでボートで移動した。水は、薄茶色で衛生的ではないが、景色は非常に綺麗だった。ココナッツやヤシの木、マングローブの木がたくさんあり、南国気分を充分味わえた。



写真12



写真13



写真14

・夕食は、18 時ごろから始まった。エビとチャーハン、フライドチキン、焼き魚、揚げ餅、イカの揚げ物、魚のすり身が入っているスープ、生春巻き、肉団子を食べた。エビは、プリプリしていて、噛ると甘みが出て、臭みもなく生き生きしていて、美味しかった。チャーハンは、パラパラしていて、中にはネギとお肉や野菜が入っていて、シンプルな味付けだった。フライドチキンは、骨つきで香辛料が効いていて、骨の部分が多くて、身が詰まっていた。油が乗っていて美味しかった。焼き魚は、外側がパリッとしていて、身が詰まっていて、淡泊な味付けだった。日本では見たことのないようなエレファントフィッシュだった。揚げ餅は、ごまが効いていて、モチモチしていて、日本人が好きそうな味付けだった。恐らく人気ナンバーワンだろう。作り方は、1 番目は、中華鍋で煙が出るくらい熱し、次に油を満遍なく広げ、お餅を投入し、油をかけながらプクプク膨らむまで揚げる。(火力が強くないと調理することができないため、家庭用の調理器具では難しいだろう)イカの揚げ物は、身が柔らかくて、揚げたてがカリッとしていておつまみには最高だった。魚のすり身が入っているスープは、水菜と魚のすり身が入っていて、薄味だった。魚のすり身は、食感がモチモチしていて、あっさりとした味付けだった。生春巻きは、ライスペーパーがモチモチしていて、野菜が多く入っていた。ヌクマムの味付けが 2 日目の体験よりあっさりしていた。肉団子は、チリソースにつけて食べた。外側がカリッとパリッとしていて、ジューシーだった。

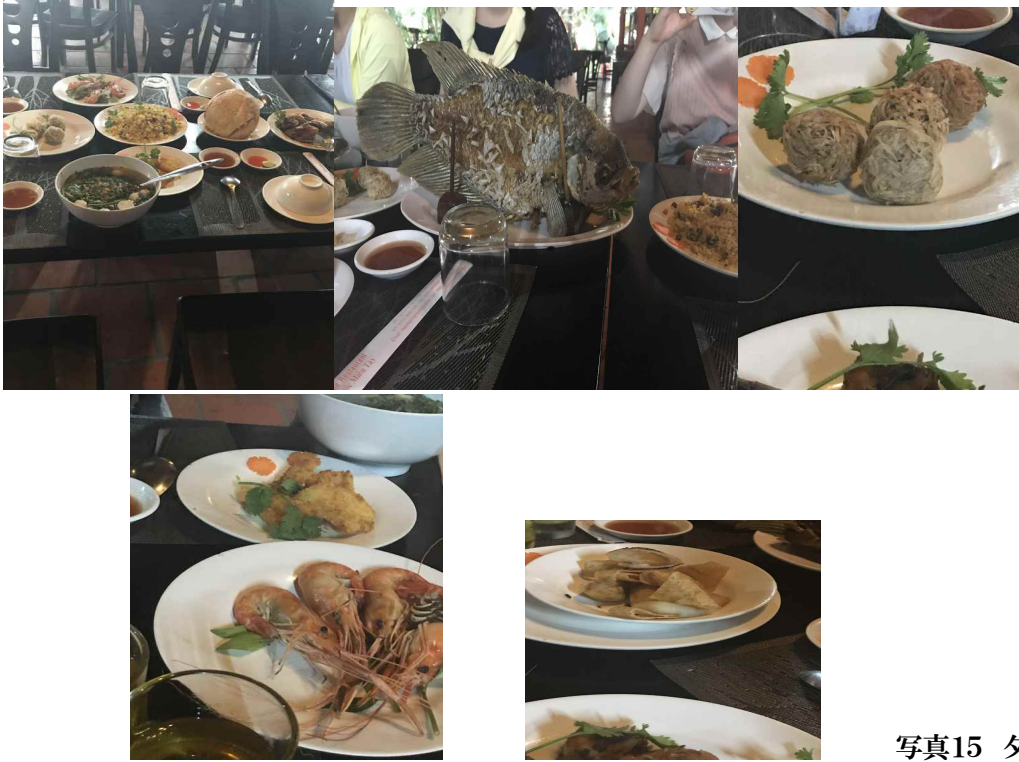


写真15 夕食のメニュー

船に目を書いてあるボートは、ワニ避けの意味があるらしい。ないものは、ほとんどの物が漁船で、目を書いてしまうと、魚が逃げってしまうからだ。船から見る景色は、星と月がはっきりと見え、静かで街中とは全く違う環境で、リラックスできた。

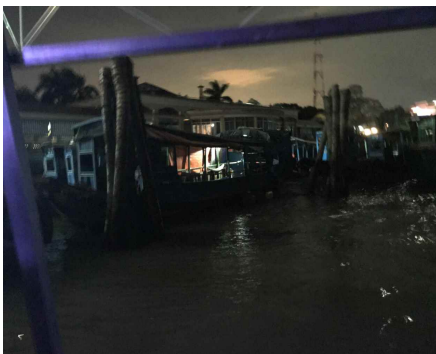


写真16



写真17 メコン川



写真18 ホタル

蛍は、木の上の方において、暗闇に目が慣れないと見つけることが難しかった。日本の蛍よりもサイズが小さかった。光も角度や距離によって、色の見え方が違っていった。近くだと、オレンジ色の光で、遠くから見ると、白い光だった。

研修4日目:安達 彩花・五十嵐 美柚

今日は大都会ホーチミンを出発し、フエへと向かう移動の日だ。私たちは朝食を食べホーチミンを11時にたった。それから約1時間半程でフエに到着した。フエはホーチミンの気温よりもずっと気温が低かった。フエは、日本の京都のような場所である。ホーチミンではあまり見られなかったベトナムの国旗に似ているデザインの旗が建物の前に立っているのが多く見られた。この旗はハンマーとカマが中心に描かれていて、共産党を表す旗だ。これがフエのあらゆる場所で見ることができた。

・昼食:着いてからまず、フエのフォーを昼食で食べた。丸テーブルが並び、4.5人で囲んで食べる。フォーは牛肉と豚肉の二種類から選べた。フォーと共にクウシンサイとネギが運ばれて自由にかけられる。さらにテーブルにはヌクナム、お酢、チリソースなどの調味料が置いてあり、好みでかけて食べることができた。フォーのスープは牛の骨から取っているらしい。麺はコメからできている。お碗に麺と肉をのせた後、スープをかけて提供される。ホーチミンのフォーは乾麺からできていたが、フエのフォーは乾燥させずカットしたものを茹でて食べる。



写真1 フォー



写真2 フォー

・ドンパン市場:フォーを食べ終えた後、フエ最大の市場であるドンパン市場へ向かった。フエの市場の雰囲気は、ホーチミンの市場とは全く違っていた。今回はホーチミンの市場のように買い物はせず、ベトナムの伝統衣装アオザイを選びに行った。アオザイは種類が豊富で、柄や生地も全て同じではなく、学生のほとんどが1つのデザインに絞る時間が足りなかったように見えた。オーダメイドでの製作のため、腕や胸囲など細かく採寸してもらった。完成形まで約2日かかると伝えられ待ち遠しく感じた。



写真3 ドンパン市場 アオザイ



写真4 環境教育準備作業

・市場を後にし、私たちはホテルに向かった。ホテルに着いてから、2時間程これからの活動で必要になるものの準備をした。環境教育で使用するカラーアナライザー、孤児院で子供たちにプレゼントするプレスレット、障害者施設にいる子供に楽器や光るおもちゃなどを準備した。この間に、各施設で披露するダンスの練習をする人もいた。

・夕食：準備をひと通り終え、夕食をとるために外へ出た。今日の夕食は、ベトナムの家庭料理であった。卵焼き、豚の角煮とエビ、豚肉が乗せられている豆腐、揚げ春巻き、サツマイモの葉など様々な種類の葉が入っているスープ、空芯菜の炒め物、ベトナムのお米で作られたご飯が今日の夕食のメニューだ。ベトナムの家庭料理は、日本の家庭料理のような優しい味がした。馴染みがある味のするものが多かったのか、追加で注文する人も何人かいた。夕食を食べてから、デザートにチェというベトナムのおやつを食べに向かった。チェは、日本のぜんざいのようなもので、実際に食べたチェもぜんざいのように小豆や白玉が入っていた。チェには、ぜんざいのような味の他に、タロイモ、フルーツ、豚まんがあった。食べ方は砕かれた氷を潰して、具をスプーンですくって食べるという食べ方だ。チェを食べ終えてからまたホテルに戻り、ダンスの練習を行った。ダンスで使う曲は、ベトナムの子供から大人まで知られている曲を使用した。約 30 分程練習をして 4 日目の日程が終了した。



写真5 卵焼き



写真6 豚角煮とエビ



写真7 豚肉豆腐



写真8 揚げ春巻き



写真9 スープ



写真10 空芯菜炒め



写真11 チェ

研修5日目:福島 歩実、東原 咲

・ベトナム戦争経験者のニエンさんの体験談:ニエンさんは北ベトナムの味方で、南に住んで南の人と戦った人である。先日当時は、法律学科の学生で、スパイとしてベトナム戦争に参加していた。労働者や市場の店の人、大学生などが南の人に紛れて、南の情報を北の本部に送っていた。1グループ3人で活動していた。これには、仮に捕まっても、捕まる人を最小限にするという狙いがある。彼らはリーダーを1人決め、常にお互い情報を交換していた。南の人間にスパイをしていることがばれないように、ストライキをして、あえて南の批判をする活動をしていた。ベトナムにきたアメリカ兵が起こした事件を世論に広めたりもした。1966年、ベトナム戦争が激化した際、アメリカ領事館を燃やしたりした。このように、南が直面での戦いに強かった分、北は情報戦で対抗した。このような反対活動だけでなく、古着や食べ物を集めて、貧しい人々に配ったり、募金を集めたりするなどの支援活動を行い、田舎の人々にも愛国心を持たせるように動いた。南の人にスパイをしていることが見つかったら、離れの島に連れていかれ、拷問されたり、殺されたりしてしまったそうだ。北ベトナムの最大の目的は、北と南の統一であったため、南ベトナムの信頼できる人を少しずつ、仲間にするなど、ベトナムが1つになるように戦った。戦争は武器を使って殺しあうだけでないということに気がついた。実質的に、北と南が統一しても気持ち的には統一し切れていない部分も未だにある。家族内での思想の違いによって、家族がバラバラになるという事もあったという。いまだに、南側が差別意識を持っており、精神的には統一されていない。今のベトナムが受け入れられない人は皆、海外に移住してしまっている。



写真1 講演会場のお茶屋

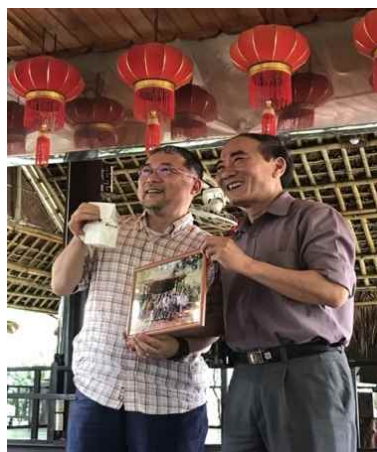


写真2 ニエンさん

・世界遺産:ティエンムー寺

空から来たおばさんという意味の寺は、1601年に建立され、ベトナムにおいて一番有名で古いお寺である。戦争などで破壊されたが、そのままのデザインで復元されている。仏教の中心地であり、ここには約100人のお坊さんが暮らしている。ほとんどの人が、農村から来た人である。彼らは、結婚や魚や肉などを食べることを禁じられている。お寺やお墓は中国の影響により漢字で記されており、彼らは漢字を書き、それらをベトナム語で読む。寺の境内にはフッドウイ塔やライホントゥ(鐘)など歴史的な建物がある。この寺の本尊の仏像は三体おり、左が未来、真ん中が現在、右が過去とされている。これを転生を表している。寺の奥には、南の仏教弾圧に抗議するために、ホーチミンのお坊さんが焼身自殺した際に移動で使った車が展示されている。焼身自殺した後もお坊さんの心臓は動いていたことから、これは『燃えない心臓』と呼ばれている。



写真3 ティエンムー寺



写真4 梵鐘

・世界遺産：フックタワーと王宮

フックタワー：1807年に建てられ、昔は見張り台として使用されていた。3つの台は上から『天地人』を表しており、中央の柱の長さは約37mである。この柱は3回変えられていて、1回目は木！2回目は鉄、今は鉄筋コンクリートとなっている。台そのものは建てられた当時から変わっておらず、レンガ製である。1945年最後の皇帝が亡くなった際に、ベトナムの国旗が掲げられた。

王宮：ウィーン王朝最後の皇帝が、仕事や生活をした場所であり、1993年に世界遺産に登録された。入口の門の右側は、文官が通り、左は武官が通り、中央は象や兵隊が通った。かつては多くの建物があったが、1967年、戦争によってほとんどの建物が焼失されている。黄色い屋根の建物は、皇帝が利用していた建物である。王宮の中には、歴代皇帝の祭壇が設置されていて、その中でも印象的だったのが、側室が500人以上いた2代皇帝と、女嫌いで化粧が好きだった12代皇帝である。



写真5 フックタワー



写真6 王宮の門



写真7 レストラン

・夕食：フオン川に浮かぶ、蓮の花を模したレストランで食事をした。メニューは、ミックスサラダ！エビ、カニ、蓮の実のスープ、グリルチキン、魚とライスペーパー、牛肉の煮込み、蓮のチェである。ベトナム独特のデザート、チェと、日本であまり食べることのない蓮の実と一緒に食べるのはとても新鮮だった。

研修6日目:松能 希・三角文香

・子どもの家訪問:6日目はフエ市運営の子どもの家を訪問した。ここは、アメリカ政府の支援によって成り立っている。教室に入り、早速小さい子ども達によるダンスと歌で歓迎を受けた。私たちは返礼として、昨日ホテルで練習したベトナムで流行している歌のダンスを踊った。拍手をもらい、皆で練習して良かったと思っていると、日本の歌も歌ってもらいたいという声が挙がった。そのリクエストに応えるため、私たちは即興で森のクマさんを歌った。その後、子どもの家の施設を案内して頂いた。人工芝生の広場が中央にあり、入り口から右手は授業をする場、左手にはキッチンや寝室など生活する場があった。子どもの家には、6歳から大学生まで30人の子どもが住んでいる。一階には男子、二階には女子が住み、部屋には、鍵のかかるクローゼットやベッド、着替える場が設けられている。二階建てベッドには大きい子が上、小さい子が下に寝る。寮母さんは3人と警備に1人、料理人がおり、一週間の献立が書かれているため、子ども達の栄養について配慮されている事がわかる。週に二回、自由参加型の歌や楽器を弾く授業もある。毎日勉強をするが、毎週日曜日はおばあさんたちの手伝いをしに行くことになっているという。子ども達は文化交流を好むらしく、私たちが来ることを楽しみにしていたと聞きとても嬉しく思った。最初は顔を隠して恥ずかしそうにしていた子ども達だったが、日本のことやこれまでのベトナム研修のことなど、子どものキラキラした目で多くのことを質問してくれ、会話をしている内に笑顔が増えていった。子どもの家は小さいながらも身内のいない子どもたちが住む場である。親のいない悲しさは、私が想像している以上に辛いことだと思う。しかし、その辛さを跳ね除けてたくましく生活をしている姿に心を打たれた。私たちに見せてくれた素晴らしい笑顔が曇らないまま、大人へと育ってほしい。また、18歳の時にこの場所を去らなければならないが、夢を見つけ目標に向かって頑張りたいと思う。

昼食作りの手伝いとして、鶏を三羽屠殺した。まず、お手本として鶏の屠殺の仕方を見たが、研修仲間には直視できない人もいた。私は初めて自分の目で鶏を屠殺している姿を見て可哀想と思いながらも、何も知らずに鶏肉を食べていたのだとありがたさを改めて感じた。そして、自分の足で鶏の足を押さえる人、手で胴体が動かないように押さえる人、絞める人と役割分担をして、鶏を捌いた。私は絞める役割だったが、鶏の頭を持って首を引っ張り、首の羽をむしり、血をとるために頸動脈辺りを切ると、手をくちばしでつついてきたり、暴れたりと抵抗を見せた。一回で目的を達しなければ鶏が可哀想だと思い、力強く包丁を引いたが、上手くいかず、二回首を包丁で切らなければならなくなった。一回で絞められたら、この鶏は苦しまなくて済んだのにと申し訳ない気持ちになった。血を抜いて数十秒経つと、体温が低くなり抵抗も弱くなっていった。日本では鶏を屠殺する場面を見る機会は滅多になく、目を背けたいところであるが、命をいただいて生きている私達は知らなければいけない事である。しかし、魚や虫を殺すことは特に感情もなく、いとも簡単にできるのはなぜだろうか。私たちは無意識に生き物の命を差別しているのではないだろうか。見直さなければいけないことではないだろうか。これは、鶏を屠殺していなければ出てこない思いであっただろう。この思いを生み出せただけでも、この命の授業は、私たちにとって大事なものとなったと思う。



写真1 命の授業の鶏



写真2 みんなで昼食

昼食は、揚げ春巻や豚肉と海老の煮物、スープ、ご飯、野菜と肉の炒め物、そして捌いた鶏の蒸し焼きを振舞ってくれた。自分たちで捌いた鶏の味は、新鮮でおいしいと思った人もいれば、命を奪った罪悪感からか、味を感じられなかった人もいるだろう。子ども達は率先してお手伝いをしたり、ご飯をよそってくれたりと心配りをしながら動く姿に、私は感心した。大人数で囲み、子ども達の溢れる笑顔を見ながら食べる料理は美味しく、楽しい昼食となった。捌いた鶏と普段何気なく食べていた鶏とでは、味の深みが違い、これが命をいただく事なのだと感じた。簡単に食物を捨ててしまう様になった日本は、食物のありがたさを忘れつつあると私は考える。この命の授業は、話を聞くだけでは分らず、自分でしっかりと五感を使って学ばなければ知ることのできない体験である。命について真摯に受け止め、考えることが命をいただく私たちの大切な役目であると思う。そして、「いただきます」と「ごちそうさま」をより一層大切にしていかなければと考えられ、鶏を捌いた瞬間から何気ない日常生活は感謝で溢れるものと変わっていった。今回、私たちが感じた事を身近な人に伝えることで、少しでも食物の命を頂く有り難さを改めて認識してもらえればと思う。

午後からは、私たち学生が子どもたちに対し、味わい教育と環境教育のアクティビティを行った。

まず、最初に行ったのは、「カラーアナライザー」で、2日前、研修仲間と作ったキットが子どもたちに配られた。「カラーアナライザー」を担当した研修仲間が「透明なフィルムを使って蛍光灯の色を見てください」と説明すると、子ども達は一齐に教室の天井を見上げ始め、しばらくすると歓声が上がった。次に「フィルムを通してどんな色が見えるか」と質問されると、次々と手が上がり、フィルムを通して見えた色が答えられていった。「光には目に見える色の他にも様々な色が折り重なっている」ということを子どもたちが理解したところで、アクティビティは次のステップへ進んだ。次に4つのグループに2つずつ、クレヨンと塗り絵が配られた。「下に書いてある色を塗ってってください」と説明を受け、子ども達が一齐にクレヨンを取った。時間に限りがある為、大学生が各テーブルに1人から2人付き、一緒に色を塗っていった。塗りおわると、今度は赤いフィルムで、自分たちで塗った塗り絵を見ていく。すると、先ほどとは違う絵が浮かび上がる。子ども達が驚いた様子で塗り絵を見ている。また、同じテーブルで違う塗り絵を塗っていた子たちの分も驚いた表情を隠せないままのぞき込んでいる様子も見られた。「赤いフィルムを通すとなんで違う絵が浮かび上がったのか」という質問に対して、「赤い色より青や緑の色が濃いから」といった答えが出て、子ども達の感性の豊かさに驚いた。

続いて行ったアクティビティは「赤い魚」である。

青いフィルムを通し20秒で魚が何匹居るのかを数えるアクティビティである。また、全部で3回このアクティビティを行い、1回ごとにフィルムを一枚ずつ重ねていく。「赤い魚」の目的は、「海の色が濃くなるとなぜ赤い魚が見えなくなるのか」ということである。子どもたちは先程行ったカラーアナライザーでの知識を生かして「赤や黄色の魚は青の色が濃いと見えなくなる」と、答えを導き出した。

休憩を取った後、味わい教育のアクティビティを行った。

担当の学生が「口に入れるもので生き物でないものは何でしょう。」と質問をした。この質問に対して、すぐに「空気」、「水」、「塩」といった答えは出なかった。やはり、質問の意味が難しかったのだろうか。次に「生き物を殺したり、傷つけないで食べられる食べ物は何でしょう」という質問が問われた。しばらく時間がかかったが「牛乳」、「卵」、「はちみつ」といった答えが導きだせた。

次にアーモンドを食べてもらい、作文を書くアクティビティを行った。このアクティビティは、アーモンドを食べることによって、「五感」の役割と普段、体どの部分を使い、食べているのかを理解するものである。また、箱の中身を当てる「ブラックボックス」や音を聞き、五官を養う「感覚教育」も行われた。また、「舌で感じる味にはどのような味があるでしょうか」という質問も出された。甘味、苦味、渋味、酸味、辛味までは答えられたが「塩味」、「旨味」という答えが出なかった。味わい教育最後のアクティビティはA、B、Cのカップに入った液体を、「五感」を使って考え、「味」を想像するものである。ちなみにAは「リンゴジュース」、Bは「お茶」、Cは「薄口醤油」である。子ども達はC「薄口醤油」を飲んだ時、顔をしかめ「美味しくない」といった表情を見せた。私にも「飲んでみて」というようにカップが渡され、飲んでみたがダシの効いた味で懐かしかった。「美味しい」といった表情をすると子ども達からは疑惑の目を向けられた。

このアクティビティを通し、私たち日本の学生は日本とベトナムの味覚の違いを知ることができたと思う。また、子ども達にとっても、「カラーアナライザー」や「赤い魚」のアクティビティを通して光や色の性質を知ることができたと思う。

さらに味わい教育を通して、動物の「いのち」を頂いているということ、また、食事をとるときに「五感」や「五官」、「味覚」がどのように役立っているのか少しでも知ってもらえたのではないかな。

私は、このアクティビティが子ども達にとって少しでも役に立つことができたらと考える。



写真3 環境教育の実践



写真4 子どもの家の子ども達と研修学生

研修7日目:五十嵐美柚・安達彩花

・障害児リハビリセンター平和村:初めに院長からお話を伺った。この障害児リハビリセンターには、障害を持った子どもたちがリハビリに訪れている。主に自閉症、知覚障害、知能障害、麻痺、引きこもりといった症状を抱えている。午前中のリハビリのみの子どももいれば、泊まり込みでリハビリをしている子もいて、主に2〜7歳の子どもがここに訪れているらしい。このような障害児が産まれるのには、環境問題によるもの、母親の知識が乏しいために妊娠中に薬を服用、栄養失調などが要因だという。

院長からお話を聞いた後、リハビリの手伝いをした。子どもたちに日本から持ってきたマラカスやピアノといった、音の出るおもちゃをプレゼントした。音の出るおもちゃは耳に刺激が伝わり、効果的だという。リハビリは2部屋に分かれて行われていた。部屋には先生が2,3人、リハビリを受ける子どもとその親がいた。子どもたちはここで順番に先生のマッサージをうけている。順番を待っている間、親たちは自分の子どもに自らマッサージをしたり、おもちゃを使って遊ばせたりしていた。マッサージは、脚をほぐしている子が多く、膝から下にかけて円を描くように揉んでいた。プレゼントしたおもちゃを使って、子どもたちに実際に音を鳴らしてみせると、音に反応して身体が動いたり笑顔を見せる子がいた。中には太鼓のおもちゃを持っていたり、マラカスを振ってみたりと、自分で音を鳴らして楽しんでいる様子も見られた。子どもによって気に入ったおもちゃがあるようで、それぞれ異なっていて個性が見られた。



写真1 リハビリの補助



写真2 リハビリの実践

その後フエ最大の市場といわれる、ドンバ市場へ行った。二階建てとなっていて、食べ物、フルーツ、衣類、アクセサリーなど数多くの店が並ぶ。一つのお店を見ても、商品棚だけでなく壁の下から上までいたるところに商品が敷き詰められ、その種類と量に圧倒された。値札はついていないので、購入するときには値段交渉が安く買うための鍵となる。日本にはない光景なので、ベトナムならではの体験で新鮮だった。フエのドンバ市場は、ホーチミンのベンタン市場よりも比較的安く、交渉に時間はかからなかったように感じた。それぞれ少人数に分かれて思いのものを買った。



写真3 生春巻きの具



写真4

・昼食:葉で包まれた料理が三品あったが、そのうち二つはバナナの葉が使われている。もう一つはベトナムの正月に出される葉だという。この葉を開けると、米粉からできた白い餅のようなものの上にエビがのせてあった。発酵させた豚肉の料理も出された。次につくねのような料理が出された。この肉はレモングラスに巻いてある。レモングラスは鼻を近づけてみると、レモンの香りがした。ライスペーパーにこの肉と野菜を包んで食べる。野菜にはにんじん、きゅう

うり、レタスの他にマンゴーが入っていた。最後にお好み焼きのような料理が出された。生地は揚げてあり、半分に折りたたまれていて中にはもやしや野菜がたくさん入っていた。



写真5 赤い魚を探せ



写真6 カラーアナライザー

・フールー小学校の環境教育実践：午後はフールー小学校を訪問した。まずは校長先生にお会いし、ベトナムの学校についてのお話を聞いた。ベトナムは小学校 5 年間、中学校 4 年間、高等学校 3 年間の教育体制である。小学校は学費なしで、幼稚園、中学校以降は学費を払うらしい。このフールー小学校は、全 10 クラスあり、生徒数は約 250 人。平日朝 7 時から授業があり、お昼一旦帰宅し、午後はまた 1 時から 4 時まで授業だという。土日休みで長期休暇は年に 1 回、6 月～8 月。日本のように冬休みや春休みはないようだ。

校長先生からお話を聞いた後、フールー小学校の 5 年生と環境教育の授業を行った。4 人 1 組の計 7 班で行う。初めは水の授業を実施した。コップいっぱいに入った水の中にフォークを使ってクリップをいくつ浮かべることができるか。どの班も真剣になってクリップを浮かべる。浮かべたクリップはどんな生き物に例えられるか尋ねた。元気いっぱいの小学生で、積極的に手を挙げて答えてくれる。アヒル、水グモなどが挙げた。そして、コップにクリップを浮かべた状態である液体を加えた。するとクリップは次々にコップの底へと落ちていく。ある液体とは、洗剤のことである。このクリップが生き物だとしたら、水に洗剤が含まれていると生き物は浮かぶことができずに死んでしまうことを伝えた。

それから、光についての授業を行った。透明のグレーティングシートと赤いフィルムで手作りしたカラーアナライザーを使った。まずは肉眼で蛍光灯の色を見て答えてもらい、その後透明のグレーティングシートで何色に見えたか聞いてみた。肉眼では白に見えても、透明なフィルムで見ると、虹色になっていた。一見一色に見えても、実際はあらゆる色からできていると感じ取ってもらった。次に、クレヨンで塗り絵をし赤いフィルムを通してその絵を見る。塗り絵をしただけでは何の形にも見えなかったものが、赤いフィルムを通すと顔や文字が浮かび上がった。子どもたちから、青系の色が浮かび上がっていることを導き出し、赤いフィルムを通すと青系の色は黒くなることを伝えた。

最後に青いフィルムを使って魚の数を数える授業を行った。魚は黒い布の上に赤や黄、青などいろんな色のフェルトで作られている。青のフィルムは三枚あり、一枚、二枚、三枚と順に重ねて数えてもらった。フィルムを重ねてみると赤い魚が見えづらくなり、実際にいる魚の数と解答した魚の数には大きなズレがあると分かった。このことから、赤は、青を重ねると黒くなる性質があると示した。

夕食：お坊さんの精進料理であった。ミックスサラダ、揚げ春巻き、チャーハン、揚げ豆腐、ジャックフルーツの和え物、鍋、白飯で、デザートにはチェが出された。精進料理には肉や魚が使われていない。ミックスサラダにはトマト、パクチー、キャベツ、油揚げなどが入っていて、ピリ辛のタレをかけて食べた。調味料が多く、ヌクナム以外にも唐辛子の入ったミソや発酵させた豆腐があった。揚げ春巻きはチリソースをかけて食べた。鍋には色とりどりの野菜と豆腐が入っている。デザートのチェは豆から作られているようだった。精進料理といっても想像より華やかな料理が並び、種類豊富だったので驚いた。



写真7



写真8・9・10 ベトナムの精進料理

研修 8 日目：吉水 祐子・野口 朋子

・フエ高等師範大学にて環境教育と味わい教育の授業

・味わい教育：8日目の今日はフエ高等師範大学へ行き、日本語学科の生徒に授業を行った。午前は味わい教育の授業を行った。まず「口に入れるもので、生き物でないものとは何か」と「生き物を殺したり傷つけたりしないで食べられる食べ物は何か」という質問をする。この質問により、普段私達が食べているものが「生き物」であるということに気が付く。次にアーモンドを食べてもらい、気が付いたことについて5分間で作文を書いてもらう。また、もう1度食べてもらい、次はどこの器官を使って食べたか聞いてみる。すると耳、目、手、口、鼻、舌など様々な答えが出される。これらを五感と言い、食事の際にとっても重要であることを説明する。次に、野菜を切る音や卵を割る音を映像なしで耳だけで感じ取ったり、中身が見えない箱の中に木の実などを入れて手の触感だけで何が入っているか当てたりするアクティビティも行った。また、舌で感じる六味が何かを考え、A,リンゴジュース B,お茶 C,水で薄めた醤油を目、鼻、口を使って当てるアクティビティも行った。これら全てのアクティビティを行った後、食事を作る時にも食べる時にも、五感がどれだけ大切か、また私たちはいつも生き物を殺して食事をしているということを説明した。



写真1 味わい教育の実践



写真2 環境教育の実践

・環境教育：午後は環境教育の授業を行った。まず、「魚はどこに住んでいるか」と「海は何色に見えるか」という質問をする。この質問と、配った3枚の青いフィルムにより、海の色は深さによって異なるということに気が付く。次に青いフィルムを通して様々な色の魚を張り付けた黒い布を見てもらい、魚が何匹見えるか数えてもらう。これを青いフィルムの枚数を変えて行くと、赤い魚は黒くなり、見えづらいということに気が付く。これは生き物の擬態などにも関係していて、生き残るために必要なことなのである。次に、赤と透明のフィルムの付いたシートを配り、蛍光灯を見てもらう。すると虹色が見えるので、それを端から答えてもらう。そしてその後ぬりえとクレヨンを配り、色を塗る。塗り終わったものを赤いフィルムを通してみると、赤系の色が見えなくなり、青系の色の部分が浮き上がるため、模様が見えるようになる。最後に水のオリンピックというアクティビティを行った。1円

玉の上にスポイトで何滴水を落とせるかというものと、水が満杯に入ったコップに何個クリップを浮かすことができるかというものだ。最後に洗剤を加えるとクリップは沈む。これは水鳥などに例えることができ、汚水により水鳥など水辺で生きている生物に影響を及ぼすという環境問題を知ることができる。



写真3 赤い魚を探せ



写真4 アオザイで授業



写真5 師範大学の学生と記念撮影

・昼食

・ボンブーフエ：昼食はフエのご当地麺、ブンブーフエを食べた。米粉とタピオカ粉を使用した太麺で、日本のうどんよりも少しモチモチしている。ピリ辛のスープに牛肉、みそのつみれに似たものとモチモチの麺の相性が良く、美味しかった。プリンも日本のプリンと違いはあまりなく、とても美味しかった。舌触りはなめらかで、何個でも食べられそうだった。



写真6 昼食風景



写真7 ブンブーフエ



写真8 プリン

・夕食

・ベトナムの卵焼き：日本の卵焼きと違い、皿に広げたまま食べる。豚肉が混ぜられていて、普通の卵焼きよりも旨みが出ていて美味しかった。(写真9)

・豚肉とエビの和え物：たれは焼き肉のたれのような味で、豚肉にもエビにもよく合っていた。ご飯とともに食べるとさらに美味しかった。(写真10)

・クーシンサイの炒め物：クーシンサイだけでなく唐辛子も入っているのでピリッとした辛みと旨みが合わさってとても美味しい。(写真11)

・筍のスープ：筍やトマト、パクチーやパイナップルに肉団子が入っていた。肉団子は魚の肉で、小骨があった。お店の人に聞くとスープも魚から取っただしでできていて、薄味で美味しかった。ご飯を混ぜると味が広がったが、箸では食べにくかった。(写真12)

・雷魚の煮物：淡白で、白身が多く食べやすい。たれは少し甘辛く、絡まっていたとても美味しかった。(写真13)

・エビの塩辛のようなたれ(写真14)：唐辛子も入っていて、熟成は浅め。豚バラ肉の煮物(写真15)をつけて食べるとピリッと刺激があり、美味しかった。

・上(写真16)：米粉の煎餅のようなもの：2日目に食べたライスペーパーを焼いたものに似ていて、ゴマが混ぜられていた。少し塩味もあり、いろいろなものを乗せて食べることができた。

・下(写真16)：サラダのようなもの：シジミ、パパイヤ、ピーナッツ、玉ねぎなどが入っているが、パクチーの味が強い。シジミとピーナッツがよく合い、美味しかった。



写真9 卵焼き



写真10 豚肉とエビ



写真11 空芯菜



写真12 筍スープ



写真13 雷魚



写真14 エビの塩辛



写真15 豚の煮物



写真16 煎餅とシジミ



写真17 デザート



写真18 夕食風景

研修9日目:最上 彩瑚・小堺 和

・トゥオンロ小学校にて環境教育:私達はまずフエから1時間半程かかるトゥオンロ小学校に訪れた。着いたら、児童達が校庭で椅子に座り歌いながら私達を出迎えてくれた。ここでは環境教育の授業を行った。少数民族の子どもたちはシャイで、最初はあまり意見を言わなかったが、だんだん慣れてきて子どもたちは積極的に発言をしてきた。アクティビティの最後に私たちから支援物資を贈呈した。支援物資は私たちがアクティビティで使用したペンやクリップ、フォークなどの文具である。なぜそれを贈呈したかという、その日にアクティビティをできなかった子どもたちにもアクティビティを体験してもらえると幸いである。今回の授業が子どもたちの勉強に役立てられればと思った。

アクティビティが終わり、校長先生がお礼の挨拶をしてくれた。その時にバナナとオレンジが出され、オレンジがとても甘かったのが印象的であった。



写真1 トゥオンロ小学校5年生の児童

・昼食:この日の昼食はかぼちゃの花、菊、枝、芽のニンニク炒め、エビの揚げ春巻き、白飯、豚の角煮、卵焼き、青菜とエビのスープだった。どれも食べやすい料理で美味しかったが、特に美味しかったものは、かぼちゃのニンニク炒めである。かぼちゃの花は中々食べられないため日本でも食べることができたら良いと感じた。



写真2 カボチャのニンニク炒め



写真3 エビの揚げ春巻き

・カトウ族に支援物資贈呈と交流:カトウ族は私達を快く受け入れてくれた。本来ならば外国人はこうした少数民族に接触することは厳しいため貴重な体験だった。私達は高床式の竹で編んだ床の集会所に案内された。生の葉っぱを入れて沸かすお茶で私たちをもてなしてくれた。最初にカトウ族について村長からの紹介あった。カトウ族は1959～1960年ごろ現在よりも1日半ほどかかる山奥に住んでいた。その頃、カトウ族は20家族しかいなく、人口は100人前後ほどだった。戦争中に民族の生活は食料不足が深刻で市内から援助を受けていた。カトウ族は山奥のジャングルにあった為、食料が中々とれなかったのだ。1965年にベト

ナム戦争で南部が苦しく、山奥へ逃げ北ベトナムに参加しホーチミンについていった。村の半分が軍隊に入り、残りの半分が食料確保をしていた。しかし戦争中に枯葉剤がまかれ、食料が中々作れなかった。最近では、ベトナム政府はカトゥー族に支援をしている。今は 175 家族おり、人口は 770 人いる。民族の生活は昔より改善されている。昔は家を作るときは木と葉っぱで使用していたが、今は政府の支援によりコンクリートなどで作れるようになった。そして最近移動手段はバイクが増え、各家族にテレビを持っている。カトゥー族は現在、主にお米作り、水牛、豚、鳥、植林を育てる仕事をしている。村長はその後歌で歓迎をしてくれた。言葉は分からなくても一生懸命もてなそうとしてくれているその気持ちが嬉しかった。また、女性によるダンス披露してくれた。村の女性は結婚する時に相手の親に伝統的なダンスを見せなければいけないので、18 歳から 19 歳までには私たちに披露してくれたダンスを必ず覚えなければならないのだ。男女で新年に踊る神様にお祈りするダンスも披露してくれて私たちも実際に体験をした。刀や杖を持ち回りながら踊っていると村の一員になったような気分になった。伝統的な楽器も披露され滅多にできない貴重な体験ばかりだった。その後子どもたちに贈呈したシャボン玉、けん玉などで一緒に遊び交流した。子ども達はすぐに遊具に慣れてくれて楽しそうに遊んでいた。

カトゥー族は料理でもてなしてくれた。もち米や豚肉を葉でまいた焼物でシンプルながらもとても美味しかった。また村の人々はお酒を好んでいるようで焼酎でも私たちをもてなしてくれた。何人かの学生は村長と飲みながら楽しそうに交流していた。カトゥー族は「ありがとう」としっかり日本語で伝えてくれた。その気持ちが本当に嬉しかったし言語が伝わる感動を覚えた。通訳がいなきゃ理解できない部分も多々あったがそれ以上にもてなす心、歓迎する心がカトゥー族の皆さんにはしっかりあった。外国人の私たちをこんなにも歓迎してくれることは本当に貴重なことであり、これからもそうした交流ができればと願った。



写真4 カトゥー族と私たち

・夕食:この日の夕食は好きなものを注文することができた。私達のテーブルは、Fried dumpling、Fried "CAO LAU" with beef, pork and tomatoes、空心菜のニンニク炒め、Beefsteak with パンなど沢山注文した。特に美味しかったのがオーストラリアの牛ステーキである。



写真5



写真6 空心菜のニンニク炒め



写真7 ステーキ



写真8 揚げ饅頭



写真9 キウイのジュース

研修 10 日目：妹尾 菜々子・塚本 玲子

・カイティン帝廟：11:00 には、カイティン帝見学をした。13 代の皇帝がある中で、今日見たのは 12 代皇帝だ。本当は 9 代目の子供だったが、亡くなったとき 4 歳だったため、すぐには即位しなかった。1916-1925 まで十年間皇帝をしており、女性が嫌いで化粧品や明るい色を好むことから「おかまの皇帝」と呼ばれている。13 人の奥さんがいたが、体が弱いこともあり子供は 1 人しかおらず、女性嫌いだったため本当の子供かは未だに不明だ。この皇帝になってから、建物を建てた。国民の約 30 パーセントの税金から作り上げているため、反対の声もあったそうだが、フランスと協力していたこともあり、市民の反対を押し切った。鉄筋コンクリートから作り上げており、縦 118m 幅 48m 階段 127 段から成っている。

また、十年間の皇帝の歴史が残っているのは 12 代目の皇帝のお墓である。この皇帝のお墓は、9m 下に置いてあるらしい。太陽とは、皇帝が亡くなったことを示してあり、現在でも親戚の人がお祈りをする日があるらしい。この皇帝には、子供がいるようだ。その子供は、小さく、フランスに留学した為、中国語は下手らしい。このお墓に書かれている文字は、キリスト教の十字架から作られた文字である。露荘にお墓が埋められている為、自分のものがどれか分からないのだ。船で遺体が運ばれ、遺体は金箔から作られているのだ。遺体は、はっきり分かるようになっているらしい。後ろに線路があり、上から見ると、遺体がわかる様になっているらしい。今は、七ヶ所遺体があり、見学できるのは、四箇所しか見学できないらしい。また、壁の飾りの物は、中国の物らしい。天井には、有名な画家が足で描いた竜の曇りの中で回っている絵が書かれてあった。何を描いているか分からないらしい。(写真1)



写真1



写真2

皇帝の写真(写真2)を見てみると、帽子を被っていて、口には化粧品を使っている様だ。



写真3



写真4

また、写真3を見てみると、東京、日本やお酒が示されており、ドアの近くに書かれてあるようだ。

写真4から、白く塗られている部分がある。それは、環論様を表しているようだ。これは、ベトナムの旧暦に沿って、お祈りしているらしい。



写真5 皇帝の写真

写真5から、皇帝のベルトにたくさんの電球が付いているのが分かる。とても、見ていて変わっている皇帝だということが一目見て分かるだろう。

・昼食：近くにあるレストランで食べた。食べ物は、できた物から出すことがベトナムでは、常識だと言うことがわかった。昼食は、揚げ春巻き、野菜の炒め物、牛肉とねぎの炒め物、野菜のスープ、くいしんさい、魚の煮物、野菜とにんにくの和え物、卵焼き、ご飯、揚げ豆腐、フルーツの盛り合わせだった。



写真6・7・8 昼食のメニュー

午後は、活動のまとめを行い、夕方までフリーだった為、ゆっくり部屋の中で過ごしたり、スパやプールで疲れを癒す人もいた。



写真9 ホテルのプール



写真10 中華レストラン

17:30 になり、空港のあるダナンへ向かった。ダナンはフエよりも栄えており、ホーチミンを彷彿とさせた。役所が非常に豪華で印象に残っている。市内の中華レストランで夕食を食べた。



写真11・12・13 夕食の中華メニュー

命の授業

1. 最上彩瑚

私は命の授業で鶏を絞めるのが怖いと思っていたが、貴重な体験のため、挑戦したいという気持ちもあった。

私たちは3人1組になって協力して鶏を絞めた。鶏は絞められるのをわかっているかのように怯えながら待ち構えていた。私はそのような鶏の姿を見たら、絞めるのがとても可哀想になってきて、絞めたくないと思った。そしていよいよ私が絞める番がきた。一人は鶏の顔を持ち首を切りやすいように毛を抜き首を切る役で、もう2人は手と足を抑える役だった。私は首を切る役をした。首を切る時鶏が苦しんでいるのを間近に感じた。私は鶏が苦しんで暴れている姿を見てとても辛くなって、怖くて段々手に力が入らなくなってきた。そして、鶏が命を引き取るのを見送り、さらに心が痛んだ。私は数日間自分の絞めた鶏のことが頭から離れなかった。

私はこの授業で私たちが日常生活で普通に食べている肉は私たちが知らない所で命を落としていて、私たちの食料の為に命を捧げていることに気付かされた。私はこれから鶏を食べるときは命の授業のことを思い出して鶏に感謝の気持ちを込めて食べることを忘れてはならないと思った。

2. 安達彩花

今回の研修に参加するかどうか迷ったきっかけになったのが、この命の授業だった。昨年度のベトナム研修報告書を読んで、率直に怖いという感情を抱いた。鳥を自分自身の手で締めるというのは、想像するだけでも恐ろしいことだった。しかし、日本にいただけでは命の大切さを理解してもしきれないのではないかと考え、今回の研修に参加することに決めた。ベトナム研修6日目に命の授業があった。まず実際にお手本を見せてもらったが、それを見るだけでも想像を絶する程衝撃的な光景だった。鳥は、足と羽を固定され首を伸ばされた時暴れずじっとして動かなかった。首を切る瞬間や血が出てくる様子など全てを間近で見て、この後実際に自分が鳥の命を奪うのだと思うと寒気がした。私たちは最後に残った鳥を裁くことになり、私は鳥の足を掴んだ。首を切る瞬間や気管を切る瞬間など手本を見た時よりも近かった。私たちが裁いた鳥の気管が上手く切れなかったので、鳥を熱湯の中に入れた瞬間バタバタと激しく動き、それが少し長く続いた。この鳥は、かなり苦しい思いをして息を引き取ったのだと思い、涙が出てきた。鳥が完全に動かなくなってから鳥の毛を抜く作業をした。毛を抜いているとき、自分たちが締めた鳥が苦しみながらもがいている様子が何度も頭をよぎった。それを思い出すと涙が止まらなかった。この鳥は私たちの食料となるために殺された。だから私たちは精一杯その命を頂くべきであると経験して改めて感じた。生き物を殺して命を頂くということは決して忘れてはいけないことであると実感することができた。

3. 小堀 和

私自身、アレルギーを持っているため残念ながら遠目から鶏を絞めているのを観察した。

後から実際に絞めた友人から話を聞くと、しっかり手順を踏んでやらないと鶏を苦しめることになることと知った。鶏自身、もう絞められることを悟っているのか静かだった。最初は羽があり大きくみえた鶏も、最終的にはとても小さくみえた。それを見た時にいつも私達が見ている鶏肉と変わらない状態だったため不思議と心が落ちついてきたと同時にこれが命が消える瞬間なのだと感じた。最初は可哀想や怖いという感情があったが、どんどん解体されていく鶏をみていると命を頂くということはこういうことであると思った。

私達は生きていくうえで生物の命を頂くことが欠かせない。そのことが自然に行われている現在こそこうした実際に自分達で鶏を絞める、光景を見ろということによって簡単に生物を粗末にしてはいけないと改めて感じた。世界中では毎日様々な食べ物が粗末に捨てられている。だからこそ、こうした授業を行うことで私達は命を頂く責任をしっかりと持つきっかけになるのではないかと感じた。たった一本のフライドチキンもそこに至るまでの背景があるということを私達はもっと自覚しなければならないと感じた。



4. 東原 咲

今回のベトナム研修において最も記憶に残ったのが命の授業であった。

日本ではすでに食材の形をした鶏をみることが多かったから、私は生き物としての鶏と食材としての鶏をどうしても同一視することができなかった。しかし、これから自分が捌く鶏を前にして自分達が鶏という生き物を食べているという事を実感した。ひとグループ3人に分かれてそれぞれ捌く人、脚を抑える人、羽を押さえる人に分担した。私は羽を押さえる役だった。捌く人が首を切った瞬間、羽がビクビク動いたから離さないように必死で脚を押さえた。その動いた羽の感触は今でも忘れられない。私のグループは比較的すぐに鶏を絞めることが出来たが、ほかの班の鶏は首を切られてもなお激しく動き続けるものもいた。苦しそうなその姿を見て私は同情してしまった。しかし私達も食べなければ死んでしまう。そう考えると、熱湯をかけて羽を毛る作業に入る頃にはその同情心は薄れていき、命を頂くという感謝の思いが湧いてきた。

このような授業は日本ではめったに出来ないことであり、最初は不安で怖かったが体験できてよかったと思う。日本に帰国して家で鶏肉を食べた時、命の授業をする前より美味しく、味わって食べることが出来た。そして食べ終わったとき感謝で胸がいっぱいになった。私はより多くの人に命の授業を受けてもらいたいと思う。

5. 福島歩実

私は血を見るのが苦手なため、手本で鶏を締めているところしか見ることができなかった。いざ、鳥を締めるという状況になると、空気がピリピリして緊張感が漂っていた。子ども達はこの情景は日常茶飯であると言って特に珍しいことではないと言っていた。1つの命が目の前で締められている姿はいままで目の当たりにしたことがなかったので、とても苦しい気持ちになった。

私たちは平気で食事を残してしまうが、このような体験をする事で、命を無駄無く頂くということが自然と体に身につくのだらうなと感じた。食べ物のほとんどは有機物であり、それは生き物である。つまり、生き物を残すことは無断な殺生に繋がるので今後、経験した事を忘れず、食べ物はそのこさず食べるようにしたいと思った。

6. 松能希

6日目子供の家で昼食のお手伝いとして鶏を捌いた。

去年ベトナム研修に行った先輩から鶏をさばくことを聞いていたのだが、実際自分がその立場になってみると恐怖を覚えた。私は足を押さえる係となった。鳥の足を持つと温かく、生き物を殺すということを改めて実感した。研修仲間の一人が首元の毛をむしり、包丁を当てると首元から血が流れた。鶏は首を切る直前まで

抵抗していたが、やがて動かなくなってしまった。現地の人は鳥を器用に丸め端に置いた。個々の人たちにとってはこの作業は日常的に行われていることなのだと考えた。

昼食に先ほど自分たちが捌いた鶏が出された。この時私は「いのち」を頂くということを改めて感じられた。日本では毎日食べられる食材が何万トンも捨てられている。その行動がとても恥ずかしいことである。私を含めた多くの日本人は動物達の「いのち」をととても軽視しているのではないか。今回この経験を通し食べ物の大切さを改めて考えさせられた。また、食事の際の「いただきます」、「ごちそうさま」の言葉は大切なものであると思う。私たちはこれから動物の「いのち」を頂いているという自覚を持ち、日々生活していかなければならないと感じた。

7. 五十嵐 美柚

これまで私は生き物と食べ物をつなげて考えていなかったと思う。食べることは生き物の命をいただくことだと学校や周囲の人から何度もきいてきて、それをよく理解しているつもりだったが、実際はできていなかった。命をいただくことを知るのには、スーパーに置かれている商品ではわからない。檻の中に4羽の鶏がいた。足はすでに縛られていて、自由に動けないようでおとなしかった。その鶏を絞め、毛をとり、調理する。この過程は今でも鮮明に覚えている。ベトナムの子供たちは、慣れた手つきで私たちに教えてくれる。彼らは私たちよりずっと命をいただくことに対して理解しているように思えた。絞めた鶏がだんだん見慣れた鶏肉の姿になっていくと、不思議と気持ちが落ち着いていた。この時これまで自分が命から目を背けていたことに気が付いた。自分は今までこの過程を知らずに食べ、時には残していたと振り返ると、どれだけ命を粗末に扱っていたのだろうと思う。「いただきます」の意味は、言葉だけでは伝えきれないものがあると実感した。衛生管理がいきわたっていて安全安心な日本のスーパーも良いが、命の価値を十分に感じられないと思う。命をいただくことから目を背けられる環境にいるのだ。生き物の命をいただく瞬間を、もっと多くの人が知っていていいと思う。この体験をすると初め聞いたときには抵抗があったが、私にとって非常に価値のある経験だった。

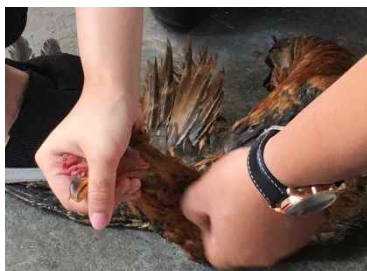
8. 吉水祐子

6日目の昼食では、命の授業として鶏を絞めて殺した。

ベトナムに来てから、いたるところで鶏を見た。市場で籠の中に入られている鶏もいれば、道路沿いの家で放し飼いされているような鶏もいた。どの鶏も運命は変わらないのだろう。けれど、今日の前で紐で繋がれ、動くことができない鶏を見ると、背筋が寒くなるような思いがした。

絞める前の鶏は紐で繋がれていて大人しく、瞳には諦めているような、怯えているような色があった。絞める時には首を切る人、足を抑える人、羽を抑える人の三人がかりで行う。私は羽を踏んで抑えていたが、鶏も生きたいと抵抗していた。締めた後鶏を熱湯に入れ、全身の羽毛を塗り取った。羽毛は柔らかく、直ぐさま皮だけの状態になった。腹を切って内臓を取り出し、その後は調理してもらった。

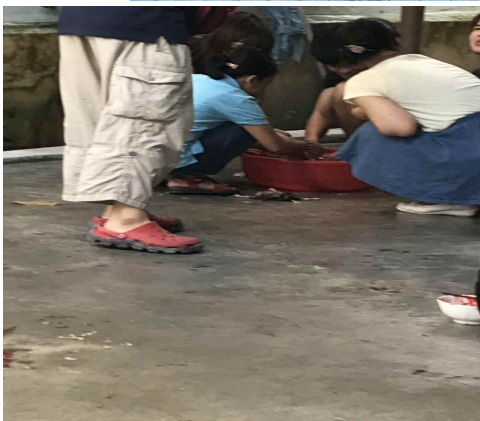
私はこれまで出来上がった料理ばかり食べてきたので、鶏のような大きい生き物を殺す様子を初めて見た。私の母が小さい頃やっていたというので私にもできるかと思ったが、見本を見て無理だと思った。ベトナムに来てからもフォーなどで鶏肉を食べ美味しかったが、今日の体験を経てもう一度同じものを食べたら、何倍も美味しく感じるだろう。普段もこの旅行中も、私はたくさんの料理を残してきた。量が多すぎるので仕方がないとは思いますが、それでも料理は他の生き物の命を奪っているのだから残したくない。今日はあらためて、そして強くそのように思った。残すのが当たり前で廃棄物に溢れる現代だが、家では必要以上のものを作らないなど個々が意識を改めていくべきだと思った。





9. 瀬尾菜々子

今日は、命の大切さについて 8:15 に皆がロビーに集まって、午前は専用車でフエ市運営の子供の家を訪問した。そこでは、子供を家の施設を案内して頂き、その後市場に昼食の食材の買い出しに行った。加えて、昼食作りのお手伝いをした。ここで、鳥を縛って、実際に命の大切さを身をもって実感しながら、鶏肉を味わうと言うものを行った。私は、手を怪我してしまい、残念ながら触れなかったが、間近で見ると命の重さについて理解した。先に鶏の首の包丁を入れる部分の毛を毛を、そのあとその部分に包丁を入れ、血を抜いた。その後、気管を切って、置いた。その後、息が捉えたら、熱湯をいれて取り出した。加えて、毛の外側を毛を。



鶏の処理を行なった後、実際に子供の家にて昼食をとった。鶏肉を一匹捌いて行なった。料理は、ブロッコリーの和え物(ごま風味)、海老と肉の和え物、牛肉(骨つき)とじゃがいものゴツゴツスープ、ミントとライムで味付けしてある骨つきの鶏肉、ご飯(タイ米)だった。ブロッコリーの和え物(ごま風味)は、日本で言うごまドレッシングの味付けだった。日本人の口に合う味付けだった。ブロッコリーの甘みを強く感じられた。海老と肉の和え物は、燻製させ、とても海老と肉の香ばしい香りが漂って、ご飯とともに良く合う味付けだった。牛肉(骨つき)とじゃがいものゴツゴツスープは、じゃがいものゴツゴツ感と牛肉のゴツゴツ感がたまらなく好きだった。骨つき肉だった為、とても肉の油がスープに染み

込んでとてもまろやかな味だった。ミントとライムで味付けしてある骨つきの鶏肉は、とてもさっぱりした味付けで、タイの和え物と同じテイストだった。パクチーの味は、あまり感じられなかったが、ミントやライムを沢山絞っており、とても酸味が強く感じられた。

10. 塚本玲子

命の授業として鳥を締める体験をした。3人1組で2人が羽と足を踏み、実際に締める人が頭を掴むという工程だった。私は締める役割で頭を掴み、固定したが、触った瞬間から鳥の温もりが感じられた。そのことから、まだ生きているということを再認識させられた。それからの作業においても鳥は必死に抵抗しており、生きたいという気持ちがひしひしと伝わってきた。締める作業をすると、鳥の力が徐々に抜けて、心なしか温度も下がったように感じられた。この世にある一つの大切な命を奪ってしまったという喪失感があった。締めた後は茹でる作業や毛を抜き、内臓を取り出す作業を行ったが、未だにショックは抜けていなかった。調理が終わった後は、子どもの家の子供たちと私たちが締めた鳥を食べたが、鳥に対して申し訳ない気持ちもありつつ、食べ残してはいけないと思いながら食べた。

今回の命の授業から、私は今の日本人に考えなければいけないことがあると考えた。私が考える問題とは、命の大切さについて知っているつもりでも実際には理解しきれていない点だ。日本では現在、食に恵まれているため、コンビニエンスストアやスーパーに行くとき簡単に食べ物が手に入る状況だ。そのため、食や命の大切さについて軽く考えてしまっている人もいるのではないだろうか。実際に私自身も、命の授業をして初めて命の大切さや重さについての本質的な部分を理解できたと考える。今の日本には、今回体験したような機会がほとんどないが、鳥を締めるまでいかなくとも、より命の大切さを理解できるような教育に変えて行く必要があるのではないか。命の授業を終えた今では、命を奪ってしまったことよりも経験しなかったら、このまま命の重さを知らないで暮らしていたということに恐怖を覚えた。これからは今回経験して理解した命の重さや食への感謝を忘れないようにしていきたい。

ベトナム研修の振り返り(次年度に向けて)

感想と反省

今回の研修では沢山のことを学ぶことができた。ベトナムの小学生や高校生、大学生、さらに少数民族の人たちと沢山のひとと交流をすることができた。お互い言葉は通じないが、笑顔やジェスチャーでコミュニケーションをとり仲良くなることができた。私はコミュニケーションの大切さを改めて感じることもできた。

そしてベトナムと日本は違う所が多く、日本の便利さと発展さに気付かされた。ベトナムはとても暑いのに飲食店や学校にはクーラーはなく、扇風機を使っている所が多かった。交通手段ではほとんどがバイクで道路はバイクで溢れかえっていた。トイレはトイレトペーパーがない所がほとんどで水が流れないトイレもあった。私はそんなベトナムで10日間滞在することが耐えきれることができるかと思っていたが、数日間過ごしてみると暑さにも汚いトイレにも慣れていった。私は生まれてからずっと便利で不自由のない日本で過ごしていたので日本のありがたみに気付くことができた。また、文化の違いはその国に実際に行き行って自分で体験しなければ理解を深めるのは難しいのではないかと考えた。私はこれからも色々な国に行き異文化を学んでいきたい。

全体を通して

今回のベトナム研修に参加した理由は、人生で経験しないだろうことを経験してみたいということだった。普通に生活して体験しないようなことを体験するという目的で参加したが、目的の通り鳥を締めたり、現地の学生や少数民族との交流など貴重な体験をすることができた。ベトナムの人々の温かみを知り、また母国である日本の良さや欠点を理解することができた。これからの学習にとっても有意義な時間を過ごすことができて感謝している。

研修のまとめ

ベトナムへ行き環境教育、味わい教育、食文化について研修を行った。どれも初めて見たものや体験したものばかりであった。

ルオンテーヴィン高校で有機学校菜園を見学し、現地の高校生と交流し日本の高校生との違いに驚いた。自分達で畑を耕し作るだけでも立派なのにその野菜を売るなど経済の事も考えていることに驚いた。私が高校生のときは野菜作りはもちろん自分が食べているものがどこでどのように出来たかなんて考えもしなかったからだ。農薬を使わないで野菜を作るには様々な工夫が必要で決して簡単ではないことを彼らから学ぶことが出来た。

フエ市運営の子供の家に訪問し、1回目の環境教育と味わい教育の授業を行った。私達は魚の数を数えるアクティビティを担当した。1回目の反省はまず意見を聞く人数を全グループであらかじめ決めておく必要があったと感じた。限られた時間の中で全てのアクティビティを行うには自分の担当だけでなく全グループが協力し合い連動することが大切だと感じた。子供達は積極的に授業に参加してくれて楽しんでくれているように見えた。しかし小学1年生にはまだ難しすぎる授業もあり、やる事が理解出来ずその子が泣いてしまうというアクシデントもあったので、子供の年齢にあったアクティビティを選択することが大切だと感じた。

子供の家の子供達は明るく元気で人懐っこく、子供同士仲が良かった。上級生は下級生の面倒をよく見ていて、人間関係的に良好であった。また、今まで訪問した場所では英語が通じない人が多かったがこの子供達のほとんどは英語が通じたことに驚いた。中には流暢に英語を話し私と英語が分からない子供との通訳をしてくれる子供もいた。また大学生も何人かいたことから、ベトナムの一般家庭より良い教育が行き渡っているように感じた。

子供達と交流するのはとても楽しかったが、ふとこの子供達は親が居なくて寂しくないのかとか、どのような経緯でこの子供達は子供の家に入ったのかなど色々な事を考えてしまった。子供達の笑顔を見て私は元気をもらい、この子供達の何か力になりたいと強く感じた。

2回目のフールー小学校の授業は、子供達が元気過ぎてとても大変だった。その小学校では風船が流行しているようで、教室に入ってすぐ星型の風船をプレゼントしてもらったのが印象的だった。自分の前のアクティビティが長引いてしまい、残された時間は僅かであったが16時半ぴったりに授業を終わらせることが出来てとても嬉しかった。

3回目の大学訪問では、少し日本語が通じるからリラックスして授業を進めることが出来た。時間が余ったから魚探しゲームをすることになったときはもう少し機転をきかせて進行すればよかったと反省した。大学生の中に、今年8月に日本に来る子がいた。その子と再開するのが今からとても待ち遠しいと感じた。

最後の授業はトゥオンロ小学校で行った。3 回目ではほかの班ともうまく協力し合えるようになっていて、スムーズに授業を進めることが出来て達成感があった。しかし子供達とあまり交流が出来なかったのが心残りであった。

この研修を通して環境教育についてのさらなる理解や人と協力して授業を進めることやベトナムの子供達のことなど、様々な事を学ぶことが出来た。それだけでなく、実際にベトナムに 10 日間滞在して現地の人々の暮らしや文化、人間性など様々なことを身をもって経験し学ぶことが出来た。それによって私の世界は大きく広がったと確信している。今回の経験は今後の人生の様々な場面で役に立つであろう。

研修のまとめと反省

私は、この研修を通して様々なことを学んだ。

初めて海外へ行って、日本と違う点を見つけ、そして日本がいかに恵まれているかを実感した。

まず、ベトナムの環境問題について、

ベトナムの環境汚染についての問題は、よく知られているが、実際現地へ行って実感した。町でゴミが至る所に落ちていたり、交通量(特にバイクが)ととても多く、排気ガスによる汚染がかなり深刻化されている。一目でわかるのが、空の色。晴れているのにもかかわらず、くすんで見えるのだ。

次に、水質汚染について、

雨が降った後のような、茶色く濁ったメコン川は、数々の国を横断して流れてきたものなので、とても綺麗な水だと言えない状況だった。それと、ホテルで出てくる水はばっと見、綺麗に見えるがもちろん飲んだらお腹を壊してしまうし、小さなカスが共に出てくるのも見えた。

最後に悪臭や騒音について。

街中は排水溝から漂う汚水の匂いやレストランへ行ったら洗っていない犬のような匂いがする。無臭であるところがないと言っても過言ではなく、気分が悪くなった。日本は、危険の際にクラクションを鳴らす風習があり、むやみやたらに鳴らさないと言われているが、ベトナムでは危険を知らせるためでなく、自分の存在を知らせるために使っているように思えた。3 秒に一回、クラクションが鳴る環境だったので、深い睡眠が取れなかった。

このように、悪い例を挙げると、日本がいかに恵まれているかを実感できるが、良い点も沢山あった。

まず、物価が安いことである。

食事や、日用雑貨はもちろん、ホテル代やタクシー代が日本の 3 分の 1 だった。

次に、関わった人全てが親切であった。

子供の家や、小学校、高校、大学で関わった人や、ホテルの方々、市場の人、皆親切で、良い人ばかりだった。子供の家では、子供たちが歌やダンスを披露してくれて、日本から来たことを歓迎してくれた。手が汚いと洗ってくれたり、わからないものを教えてくれたり、些細なことまで気遣ってくれた。

高校では、一緒に食事を作る時にサポートしてくれたり、ライスペーパーに具材を挟んで渡してくれる子もいた。

妙に男性が親切なので、気を使いすぎではないのかと疑問に思ったが、これはベトナムでは当たり前の風習で、『女性は神よりも上の立場にいる』という、言い伝えがあるそうだ。なので、亭主関白という概念がベトナムにはないんだろうなと実感した。いままで何に関しても日本がいちばんと思っていたが、それは違った。ベトナムは、女性が暮らしやすい国だなと思い、こういった点が日本よりも優れているなと実感した。

この研修の中で、見直すべきだなと感じたのは、アクティビティの準備についてである。

前もって誰が何をやるかを事前に計画し、臨機応変な対応をもできるように準備をするべきであったと感じた。出し物も、全て完成させてからではなくても良いので、ある程度何をやるのか、そしてどんな曲を使うのかなど決めておいたほうがよかったのではないかと感じた。

プレゼントした、画用紙のやつ(赤色と透明のやつ)も、事前に準備したいと思った。急いで作ってぐちゃぐちゃなものを渡さず、気持ちを込めて丁寧に作ったものをプレゼントしたかった。

ベトナムフォトアルバム(集合写真)









CỘNG SẢN VIỆT NAM QUANG VINH MUÔN NĂM









ベトナム海外研修を終えて～品川 明

ベトナム国際協力研修を振り返り、参加した学生は多くのことを感じ、多くのことに気づいたと思います。また、いろいろな角度や視点で物事を思考し、様々な繋がりや関わりがあることも気づいたことと思います。

成田空港には全員が定時に集合し、約6時間のフライトがあつという間に感じました。ホーチミンに到着すると暑さとバイクの多さに驚嘆し、戦争証跡博物館では戦争の悲惨さを実感致しました。夕食の花鍋はベトナムホーチミンの気候が育む郷土食を堪能いたしました。2日目は大都会でありながら、未だに残る路地裏の市場、多くの住民が日々の食を調達している風景は昔の日本の姿を彷彿させました。バスに揺られ、チャンドゥー村へ、ここは露干しライスペーパーの産地です。学生全員がライスペーパー作りを体験し、プロの手際の良さに感心していました。昼食は野菜たっぷりのライスペーパーで包む生春巻きです。学生は野菜の種類や味わいの複雑さにやはりびっくりしていました。ハンモックカフェで休息後、ベントン市場の見学と買い物をしました。夕食はこれもホーチミンの郷土料理、山羊の焼肉とその鍋です。歯応えとつけダレ、鍋の淡い味と日本と同じだしの味に感心しました。3日目はルオンデーヴィン高校を訪問しました。有機農園を実践している高校で、土作りから始め、販売まで手がけるようになるまでの苦労を伺いました。昼食は自分たちで教わりながら作った郷土料理バインセオを食べました。夕食はベトナム南部地方の郷土料理を食べ、夜空にキラキラと点滅する蛍を鑑賞しました。4日目はいよいよ活動の拠点フエです。フエ到着後、環境教育や味わい教育で使用する物品を調達し、アオザイをオーダーしました。その後、明日以降の実践に向けてホテルの6階で納得いくまで準備に時間を割きました。5日目はベトナム戦争体験者であるニエン氏の体験談を伺いました。また、学生へは戦争の無い世界を築いて欲しいことを訴えていました。6日目、いよいよ子どもの家での実践です。まず、昼食の準備として、鶏をしめる命の授業を実践しました。学生は食べることは何かをそれぞれ感じたようです。午後は環境教育班と味わい教育班がそれぞれ初めて授業を実践し、多くの反省点と授業をする上での心得を体感したようです。7日目は障害児リハビリセンターでは日本で購入したおもちゃを利用してリハビリの手伝いを実践しました。午後はフールー小学校での環境教育の実践です。環境教育班は赤い魚を探せとカラーアナライザーを実践しました。フールー小学校の児童たちの元気の良さに圧倒されながらも、児童たちに多くの気づきを引き出していたのは素晴らしいことです。また、反省点も自分たちで感じ改善点を学生自らが対応していたことは特筆に値します。8日目は師範大学での交流です。午前中は味わい教育の交流です。ベトナムの学生はうま味を含め、味わい能力が高いことが分かりました。午後は環境教育の2回目の交流です。フールー小学校の時と異なり、スムーズに授業が進行しました。その中で多くの環境教育の概念を引き出せたと思います。9日目は山岳少数民族のトゥオンロ小学校での3回目の環境教育交流です。学級経営がしっかりした学校で、教科書で勉強したことがなかった児童にとって、先生も児童も体験して学びが得られることに驚きと楽しさを感じたようです。今後の多くの児童に実践して頂きたいと願い、教具を小学校に寄贈してきました。昼食後、少数民族の村に行き、支援物資の贈呈と文化交流を致しました。村の長老が他界し、寂しさがありましたが、村長さんを始め、村の皆さんから民族の踊りや音楽で大歓迎を受けました。学生も歌や踊りで返礼いたしました。10日目は疲れを癒す目的と振り返りの時間を作るために、ホテルでの滞在時間を多くしました。特に、カイディン帝廟でのアオザイを着た見学は現地の人も驚く華やかさでした。見学終了後の大雨が印象に残っています。

最後に、ベトナムの海外研修を遂行するためには、多くの方々の関与、とりわけ、学習院や学習院女子大学の多くのスタッフ、ピースインツアーの小山さん、ベトナムの視察交渉ではミンさんに大変お世話になりました。また、ベトナムでお世話になった訪問先の皆様、授業と交流の場を提供頂いたフールー小学校、トゥオンロ小学校、フエ高等師範大学の児童、生徒と先生方の皆様、多くの方々の協力があったて遂行できたと実感しております。ここに深く感謝申し上げます。素晴らしい体験と交流をご提供頂き有り難うございました。(志染)

